

フ ァ イ ル 21

北 原 白 秋

北原白秋歌碑

所在地 北海道深川市一已(きよ)町 丸山公園西展望台

一已の 北原白秋

屯田兵の村

ならし

やゝに夕づく

この眺望を

碑陰

大正十四年夏白秋深川を訪れ
屯田開拓の偉業を偲んで此の歌を作る
深川市開基八十年市制十年記念協賛

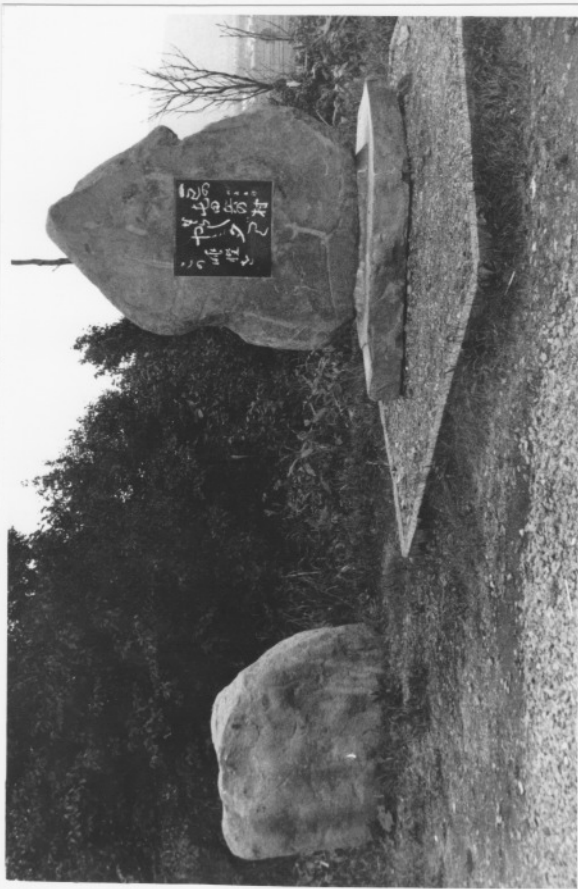
昭和四十八年八月

丸山観光協会建之

(注) 書は書道家の三上沢南氏
かゝ望のまを首へに望をいふは

略歴

北原白秋 本名 隆吉 明治十八年一月
二五日 福岡県山門郡沖端村沖端石
場(生まれは南関の母の実家) 早
大英文科予科中退 昭和十七年十二月二
日歿す 享年五七歳 法名なし 墓は
東京都府中市多磨町 多磨霊園十区
一三二側六番にある



北原白秋歌碑

所在地 北海道深川市一已(いちやん)町 丸山公園 西展望台

一已の北原白秋

屯田兵の村

ならし

やゝに夕づく

この眺望を

碑陰

大正十四年夏白秋深川を訪れ
屯田開拓の偉業を偲んで此の歌を作る
深川市開基八十年市制十年記念協賛

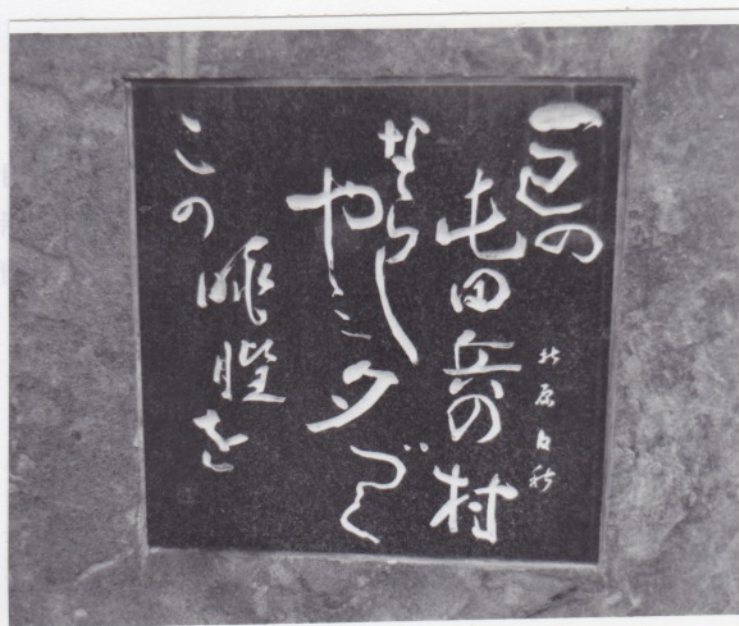
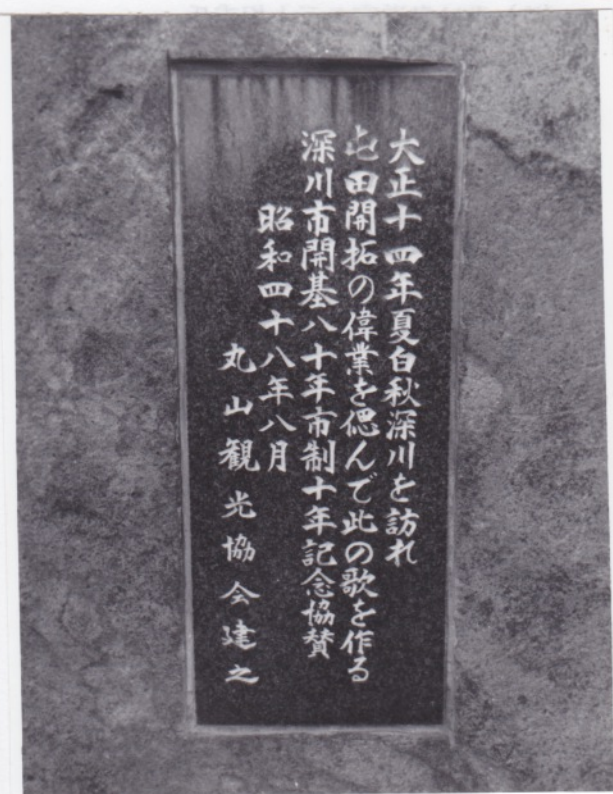
昭和四十八年八月

丸山観光協会建之

(注) 書は書道家の三上昶甫氏
しかし望に目へんがつく
字は無い筈

略歴

北原白秋 本名 隆吉 明治 18 年 1 月 25 日 福岡県山門郡沖端村沖端石場
(生れは南関の母の実家) 早大英文科予科中退 昭和 17 年 11 月 2 日歿す
享年 57 歳 法名 なし 墓は東京都府中市多磨町 多磨霊園 10 区 1 種 2 側
6 番にある

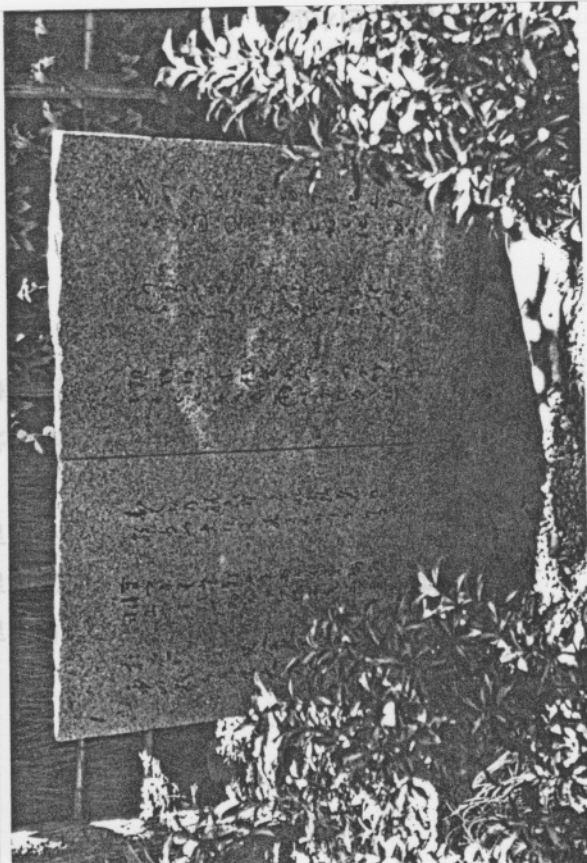
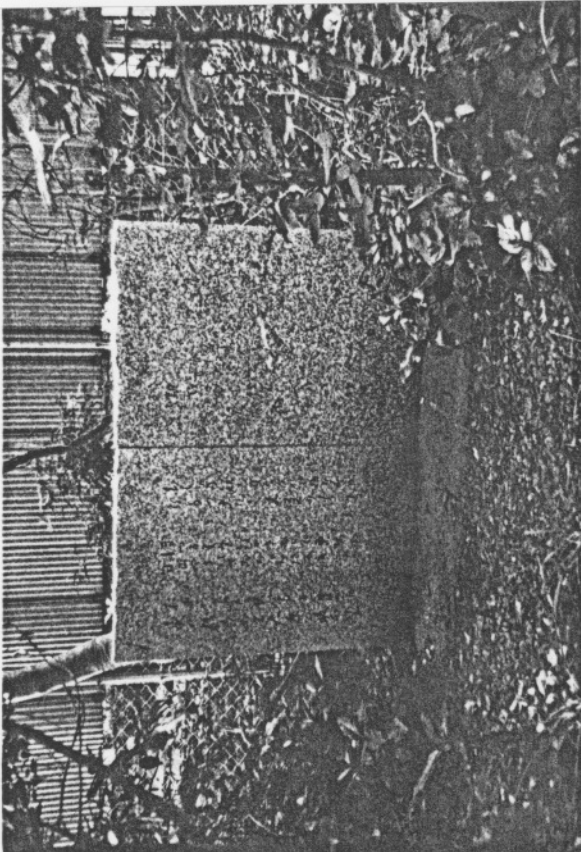


北原白秋・木下利玄・石川啄木・若山牧水・長塚節・斎藤茂吉歌碑

所在地 岩手県盛岡市梨木町二番一号 故伊藤岩太郎氏宅庭内

やわらかに柳青める北上の
 岸邊 目に見ゆ泣けと如くに 啄木
 うゑだめてしをりよろしき秋草の
 はなのさかりを見て遊ふなり 白秋
 親竹はふし枝垂れつゝわか竹は
 ますくに立ちて雨にうたるゝ 牧水
 白はにの瓶こそよけれ霧なから
 朝はつめたき水くみにけり 節
 ぽっかりと朝日子あかく東海の
 水にうまれてゐたりげるかも 茂吉
 お堂いつれは只今の間に日はかくれ
 雨の粉ちれり大原の峽に 利玄

碑陰



む
 壬午年
 伊藤岩太郎氏宅庭内
 斎藤茂吉

北原白秋・啄木・牧水・節・茂吉・利玄歌碑

所在地 岩手県盛岡市梨木町 2-1 故伊藤岩太郎氏宅庭内

や わ ら か に 柳 青 め る 北 上 の

岸 邊 目 に 見 ゆ 泣 け と 如 く に 啄 木

う ゑ た め て し を り よ ろ し き 秋 草 の

は な の さ か り を 見 て 遊 ふ な り 白 秋

親 竹 は ふ し 枝 垂 れ つ ゝ わ か 竹 は

ま す く に 立 ち て 雨 に う た る ゝ 牧 水

白 は に の 瓶 こ そ よ け れ 霧 な か ら

朝 は つ め た き 水 く み に け り 節

ぽ っ か り と 朝 日 子 あ か く 東 海 の

水 に う ま れ て ゐ た り け る か も 茂 吉

お 堂 い つ れ は 只 今 の 間 に 日 は か く れ

雨 の 粉 ち れ り 大 原 の 峡 に 利 玄

碑陰 玉 詠 六 首／繁太郎題む／昭和三十七年／梨泉宮／伊藤□

北原白秋歌碑

所在地 福島県須賀川市牡丹園六十二 牡丹園内

須賀川の 白秋

牡丹の木の

めでたきを

炉にくくよちふ

雪ふる夜半に

門人木俣修書

碑陰

牡丹の季節が過ぎて 月餘になった みちのくは巨河の關にちかく
須賀川の牡丹は木の古いので知られてゐるが このほどその園主の
しるべから焚木としてそのひとくくりを送つて來た 冬夜牡丹の木
を焚くといふことは話には聞いてゐたが それは何といふ高貴な雅
びかと思はれる 眼を病む今の私にはいみじき贈りものでないこと
はない

爐にくべて上無きものは木にして牡丹ぞといふにすべなほほゑむ

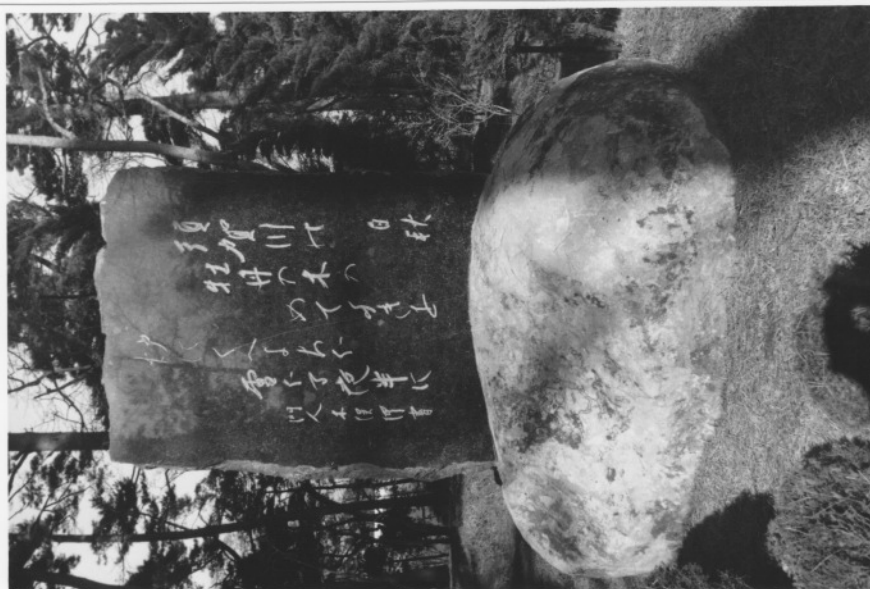
須賀川の牡丹の木のめでたきを爐にくくよちふ雪ふる夜半に
牡丹の黒木さしくべろりべやはかほかとあらむ冬日おもほゆ

この東のそばくの木色にして牡丹けだしや昨句ひける

茶の料と冬は牡丹の木を焚きてなに乏しまむ我やわびつつ

白 秋

昭和四十五年五月 建之



北原白秋歌碑

所在地 福島県須賀川市牡丹園 80-1 牡丹園内

須賀川の 白秋

牡丹の木の

めでたきを

炉にくへよちふ

雪ふる夜半に

門人 木俣修書

碑陰

牡丹の季節が過ぎて 月餘になった みちのくは白河の關にちかく
須賀川の牡丹は木の古いので知られてゐるが このほどその園主の
しるべから焚木としてそのひとくくりを送って来た 冬夜牡丹の木
を焚くといふことは話には聞いてゐたが それは何といふ高貴な雅
びかと思はれる 眼を病む今の私にはいみじき贈りものでないこと
はない

爐にくべて上無きものは木^{ぼく}にして牡丹ぞといふにすべなほほゑむ
須賀川の牡丹の木^{ぼく}のめでたきを爐にくべよちふ雪ふる夜半は
牡丹の黒木さしくべゐろりべやほかほかとあらむ冬日おもほゆ
この束のそこばく^{ぼく}の木色にして牡丹けだしや昨^{きの}匂ひける
茶^{しろ}の料と冬は牡丹の木^きを焚きてなに乏しまむ我やわびつつ

白 秋

昭和四十三年五月 建之



北

あさよへうの味

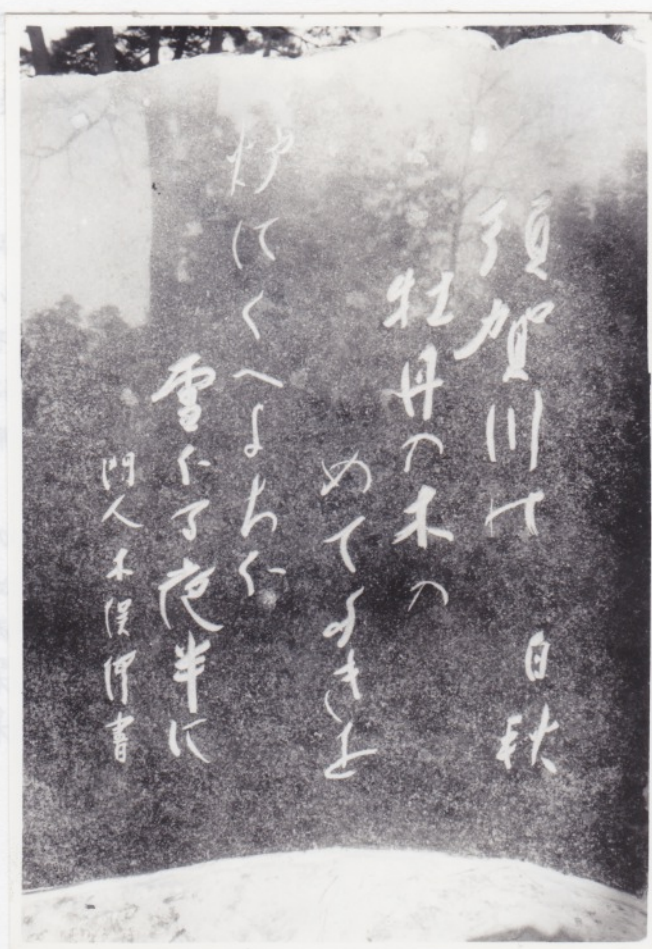
半



昭和四十二年五月

巻之

白 秋



夏賀川 日秋

牡丹の木へ

めでたきと

けいくへん

雪下り夜半に

門人木俣伊書

北原白秋文学碑

所在地 群馬県前橋市千代田町三十二 前橋文学館前 朔太郎橋

鶯 べ ん

信州の菅掛ではまだ冬だったが、碓氷峠を越えると、妙義へかけて燃ゆるやうな新緑であつた。そのところどころに まだ深山つつしが咲き盛つてゐた。晩冬から初夏へ 一二時間で飛び越してゐた。それから 前橋まで下るといよいよ夏らしくなつて、楓の花などが、そこらの寺の庭にちりしいてゐた。桑の畑も緑が深かつた。

萩原朔太郎君をたづねると、日の丸の旗が門さきにひらひらしてゐた。ほう今日は何の祭日かなときくと、いや、あんたが来るから出したのだと云つた。さう云へば日の丸の國旗を出してゐるのは萩原君の家ばかりであつた。眼眶があつくなるほどうれしかつた。私は妻子と一泊さして貰つて 翌日上京した。

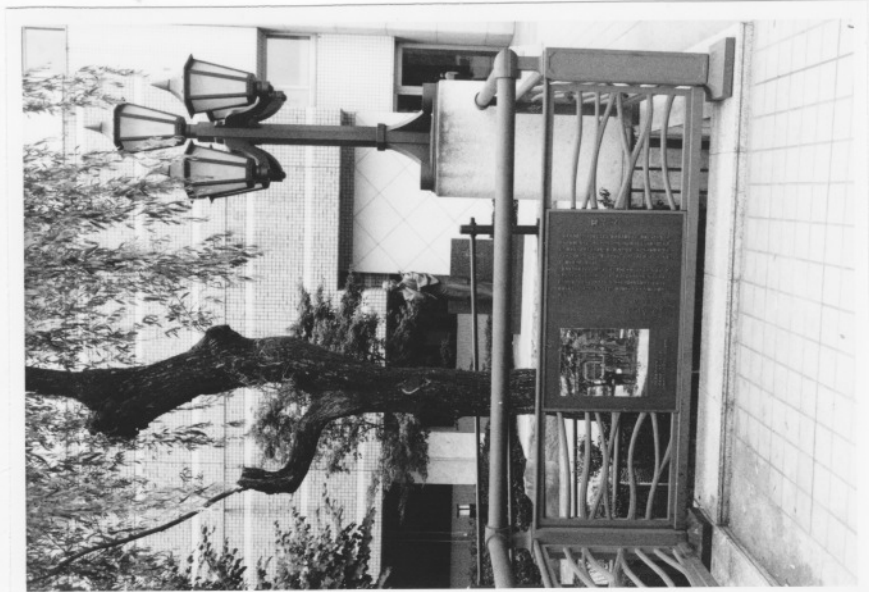
詩意集 (奎王集)より

北原白秋

白秋来橋記念写真（於東照宮、大正四年二月）がある

碑陰

文字なし



北原白秋文学碑

所在地 群馬県前橋市千代田町 3・12・10 前橋文学館前 朔太郎橋

鶯 ぺ ん

信州の沓掛ではまだ冬だったが、碓氷峠を越えると、妙義へかけて燃ゆるやうな新緑であった。そのところどころに まだ深山つつじが咲き盛ってゐた。晩冬から初夏へ 一二時間で飛び越して了った。それから 前橋まで下るといよいよ夏らしくなって、楓の花などが、そこらの寺の庭にちりしいてゐた。桑の畑も緑が深かった。

萩原朔太郎君をたづねると、日の丸の旗が門さきにひらそらしてゐた。ほう今日は何の祭日かなときくと、いや、あんたが来るから出したのだと云った。さう云へば日の丸の國旗を出してゐるのは萩原君の家ばかりであった。眼 があつくなるほどうれしかった。私は妻子と一泊さして貰って 翌日上京した。

「詩と音楽」(大正十二年六月号)より

北 原 白 秋

白秋来橋記念写真(於東照宮、大正四年一月)がある

碑陰

文字なし



白鳳園 (大正二十六年六月)

白鳳園

白鳳園 (大正二十六年六月)

白鳳園

白鳳園

鷺へん

信州の春掛ではまだ冬だつたが、稲米線を通ると、妙義へかけて進むやうな新緑であつた。そのころから、またまた山つづつと咲きだつた。晩冬から初夏へ二時間で飛び越してつた。それから開欄までさうといふと夏らしくなつて、梅の花などが、そのころの庭にちりちりしてゐた。桑の葉も緑が深かつた。

萩原朔太郎君をたづねると、日の丸の旗が門ききにひらひらしてゐた。ほう今日は何の祭日かなときくと、いや、あんたが来るから出したのだと云つた。さう云へば日の丸の旗を出してゐるのは萩原君の家ばかりであつた。眼曜があつくなるほどうれしかつた。私は黙して泊まらして夏つて翌日上京した。

(大正二十六年六月)

あやちや

・白秋来園記念写真
・於東照宮、大正4年1月
・右から3人目明太郎、4人目白秋

鷺へん

信州の春掛ではまだ冬だつたが、稲米線を通ると、妙義へかけて進むやうな新緑であつた。そのころから、またまた山つづつと咲きだつた。晩冬から初夏へ二時間で飛び越してつた。それから開欄までさうといふと夏らしくなつて、梅の花などが、そのころの庭にちりちりしてゐた。桑の葉も緑が深かつた。

萩原朔太郎君をたづねると、日の丸の旗が門ききにひらひらしてゐた。ほう今日は何の祭日かなときくと、いや、あんたが来るから出したのだと云つた。さう云へば日の丸の旗を出してゐるのは萩原君の家ばかりであつた。眼曜があつくなるほどうれしかつた。私は黙して泊まらして夏つて翌日上京した。

(大正二十六年六月)

あやちや

・白秋来園記念写真
・於東照宮、大正4年1月
・右から3人目明太郎、4人目白秋

北原白秋歌碑

所在地 群馬県安中市磯部町 温泉公園内

華やかにさひしき秋や千町田の

はなみかするゑを群雀立つ

白秋

碑陰

文字なし

説明板

北原白秋(二六五—二七三)

九州、柳川市生れ。早大中退。本名隆吉。
明治、大正、昭和を代表する天才的詩人、歌人。
拓次、朔太郎、犀星等その他多数の詩人
を育てた。晩年は短歌雑誌「多磨」
を主宰。

主な著書。

詩集「邪宗門」「思ひ出」歌集「桐の花」
「雲母集」「雀の卵」童謡集「トンボの眼玉」
等多数。

華やかに淋しき秋や千町田の

穂波が末を群雀立つ (自筆)

○大手拓次の墓参の折書き置いたもの。



北原白秋歌碑

所在地 群馬県安中市磯部町 温泉公園内

華やかにさひしき秋や千町田の
ほなみかすゑを群雀立つ

白 秋

碑陰

文字なし

説明板

北 原 白 秋 (一八八五—一九四二)

九州 柳川市生れ。早大中退。本名隆吉
明治 大正 昭和を代表する天才的詩人。歌人。
拓次、朔太郎、犀星等 その他多数の詩人
を育てた。晩年は短歌雑誌「多磨」
を主宰。

主な著書

詩集「邪宗門」「思ひ出」歌集「桐の花」
「雲母集」「雀の卵」童謡集「トンボの目玉」
等多数。

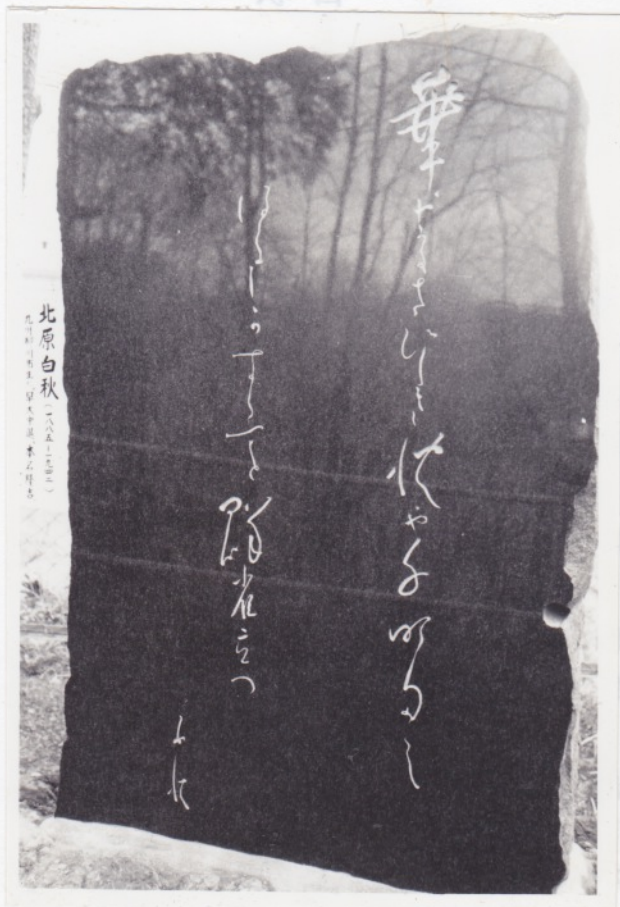
華やかに淋しき秋や千町田の

穂波が末を群雀立つ (自筆)

○大手拓次の墓参の折書き置いたもの。



北



北原白秋 (一八五二—一九三三)
九州柳川市生れ。早大中退。本名隆吉。
明治、大正昭和を代表する天才的詩人。歌人。
拓次、翔太郎、犀星等その他多数の詩人
を育てた。晩年は短歌雑誌「多磨」
を主宰。



北原白秋 (一八五二—一九三三)

九州柳川市生れ。早大中退。本名隆吉。明治、大正昭和を代表する天才的詩人。歌人。拓次、翔太郎、犀星等その他多数の詩人を育てた。晩年は短歌雑誌「多磨」を主宰。

主なる著書

詩集「邪宗門」「思ひ出」歌集「桐の花」「雲母集」「雀の卵」童謡集「トシボの眼玉」等多数。

華やかに淋しき秋や千町田の穂波が末と群雀立つ (自筆)

。大手拓次の墓参の折書き置いたもの。

北原白秋歌碑

所在地 群馬県利根郡水上町 湯桧曾遊園地内

こころしかる

湯桧曾の村や

片谿と

日ざしたのめて

冬はありつつ

北原白秋

碑陰

文字なし

(説明木碑)

こころしかる湯桧曾の村や片谿と

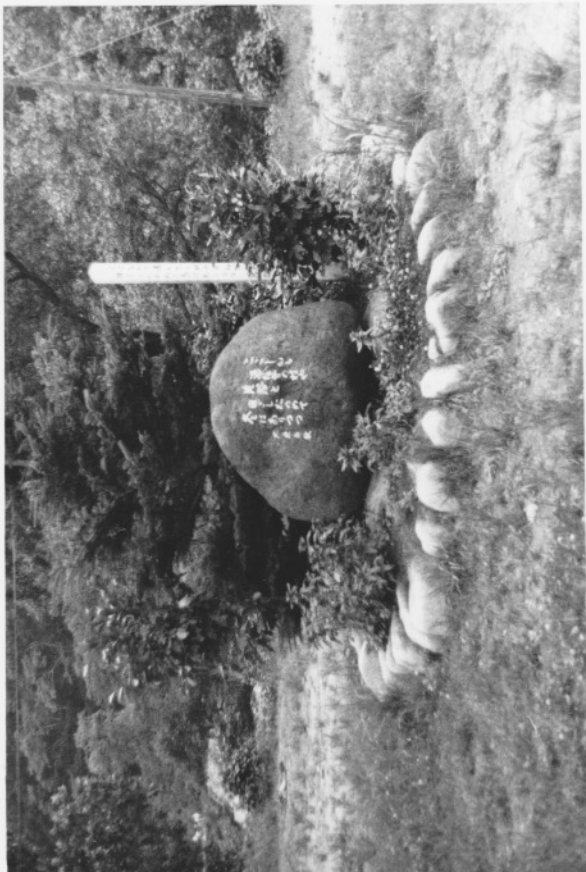
日ざしたのめて冬はありつつ 北原白秋

左側面 昭和十四年十月中旬湯桧曾へ

遊吟 当時五十五才

右側面 水上町観光課

裏面 昭和五十七年十一月一日建之



北原白秋歌碑

所在地 群馬県利根郡みなかみ町 湯檜曽遊園地内

こごしかる

湯檜曽の村や

片谿と

日ざしたのめて

冬はありつつ

北原白秋

碑陰

文字なし

(説明木碑)

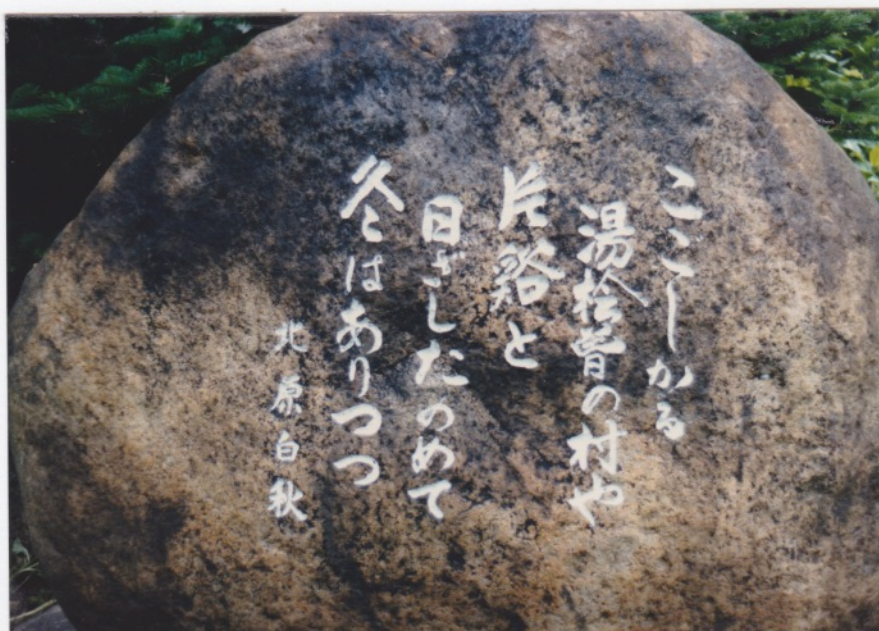
こごしかる湯檜曽の村や片谿と

日ざしたのめて冬はありつつ 北原白秋

左側面 昭和十四年十月中旬湯檜曽へ
遊吟 当時五十五才

右側面 水上町観光課

裏面 昭和五十七年十一月一日建之



北原白秋歌碑

所在地 群馬県碓氷郡松井田町横川三六 JR横川駅前 国道脇

うすいねの 白秋

南おもてと

碑陰

文字なし

くだりつ なりに

思ふ け

春の

ふか
きを

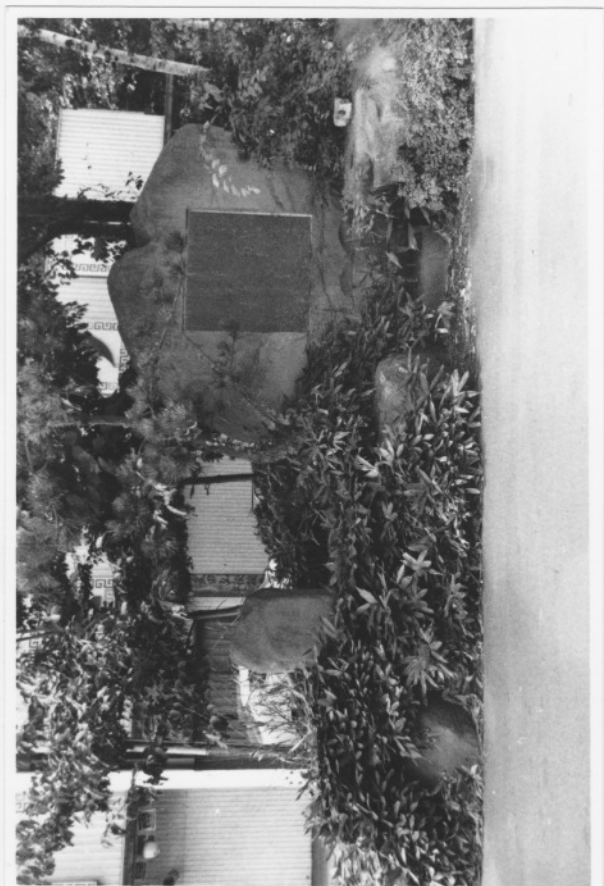
副碑

うすいねの南おもてとなりにけり
くだりつ、思ふ春のふかきを

この歌は近代日本詩歌壇の巨星である
北原白秋先生が大正十二年信濃に旅し
ての帰路この峠において「碓氷の春」と題
してよまれたものである

副碑裏面

企画 前橋 森泉賢吾
賛助 横川 関永五郎
前橋 東宮七男
同 飯沼實六
昭和三年五月 日
施主 横川 武田弘彦



北原白秋歌碑

所在地 群馬県安中市松井田町坂本 峠の 裏アプトの道(元横川駅前の国道脇にあったもの)

うすいねの 白秋

南おもてと

くたりつゝ なりに

思ふ け

春の り

ふか

きを

碑陰

文字なし

副碑

うすいねの南おもてとなりにけり
くたりつゝ思ふ春のふかきを
この歌は近代日本詩歌壇の巨星である
北原白秋先生が大正十二年信濃に旅し
ての帰路この峠において「碓氷の春」と題
してよまれたものである

副碑裏面

企画 前橋 森 泉 賢 吾
横川 関 永 五 郎
賛助 水戸 丹 四 郎
前橋 東 宮 七 男
同 飯沼喜八郎

昭和四十二年五月 日

施主 横川 武田弘建之



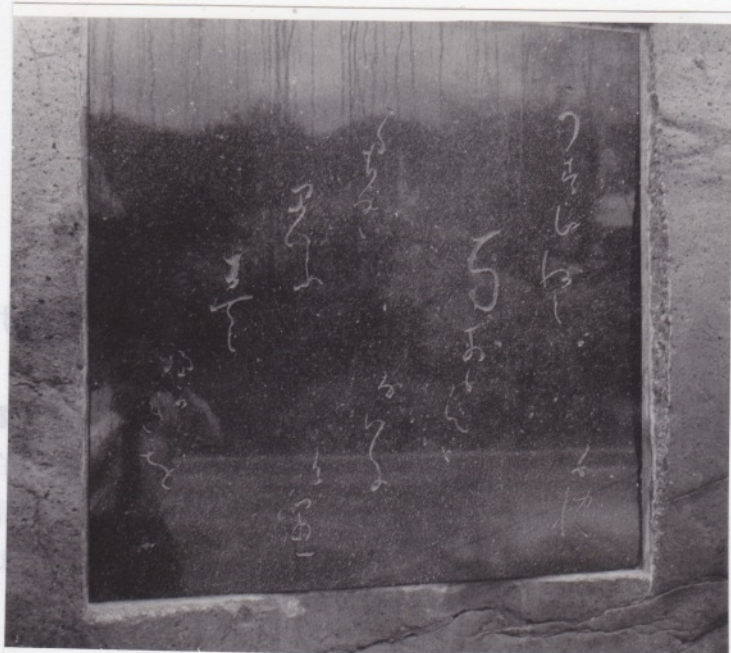
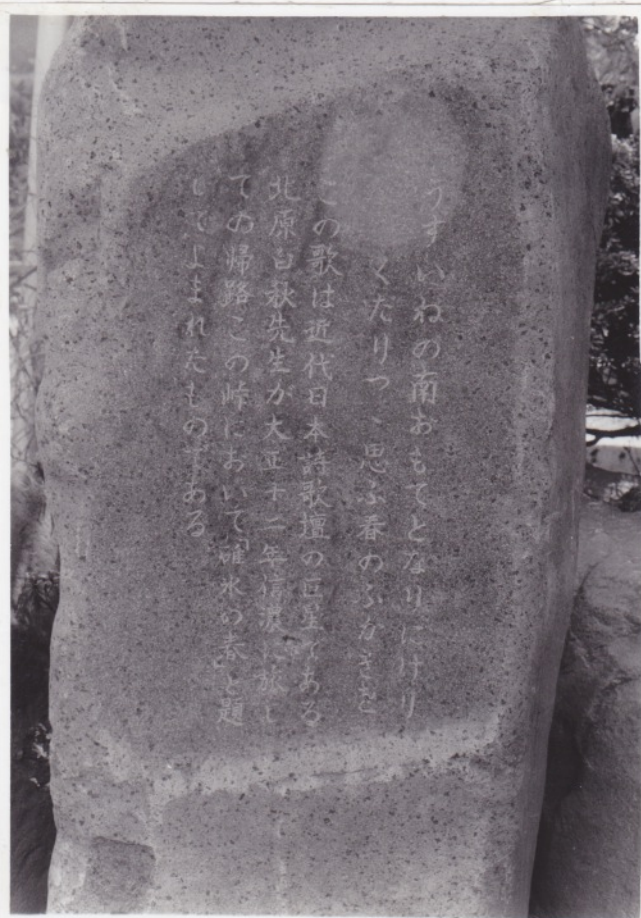
せ

思ふ

り

の春

はる



日 辰正平二十四時御
文藝部田丸 川岸主藏

北原白秋詩碑

所在地 埼玉県久喜市久喜青葉団地 青葉小学校通学路

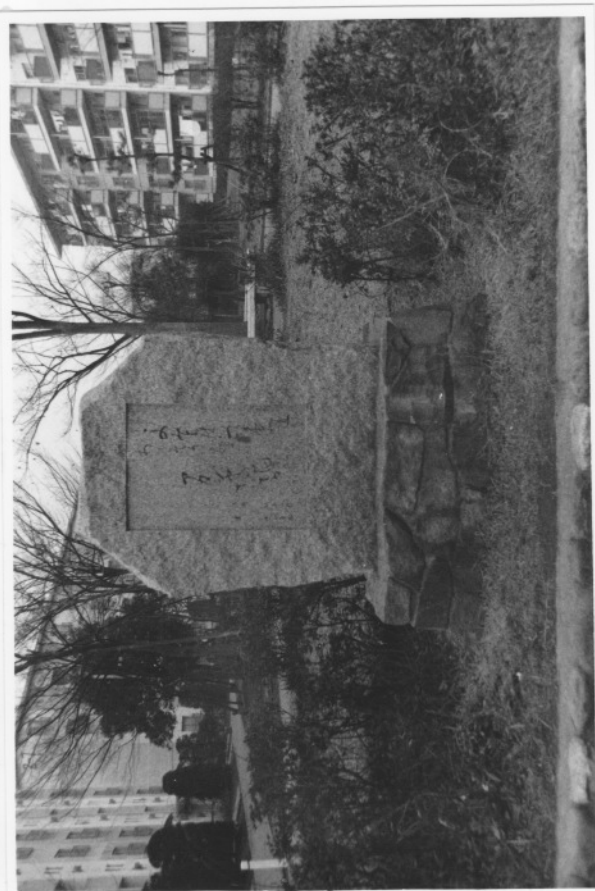
このみちはいつか来た道
あゝそうだよ

碑陰

文字なし

アカシヤの花が
さいてゐる

作詞 北原白秋
書 中山華樹



北原白秋詩碑

所在地 埼玉県久喜市 久喜青葉団地 青葉小学校通学路

道

このみちはいつか来た

あゝ そうだよ

が

アカシヤの花 ー る

さいて

作詞 北原白秋
書 中山華樹

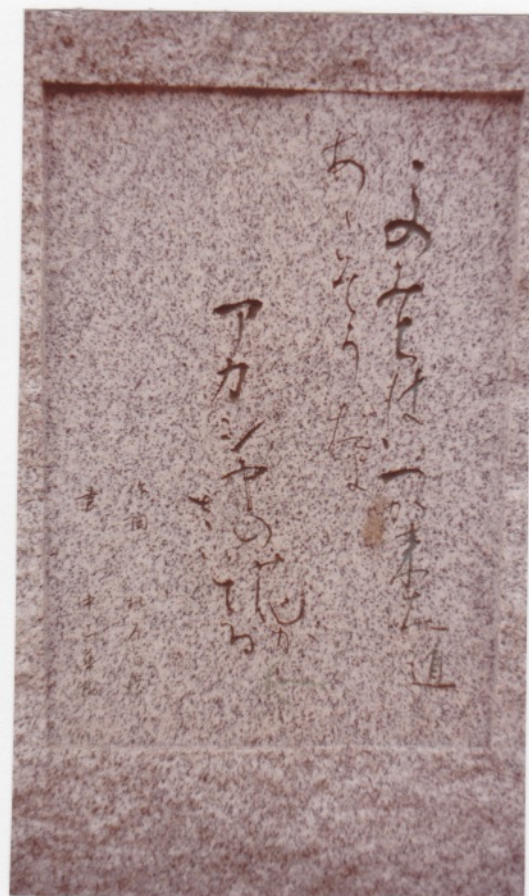
碑陰

文字なし



る 花のすじなで

アカ



北原白秋歌碑

所在地 千葉縣市川市国府台三九 里見公園内 紫烟草舎横

白 秋

華やかに

そひ

しき

秋や

千町田の

はなみか

すゑを

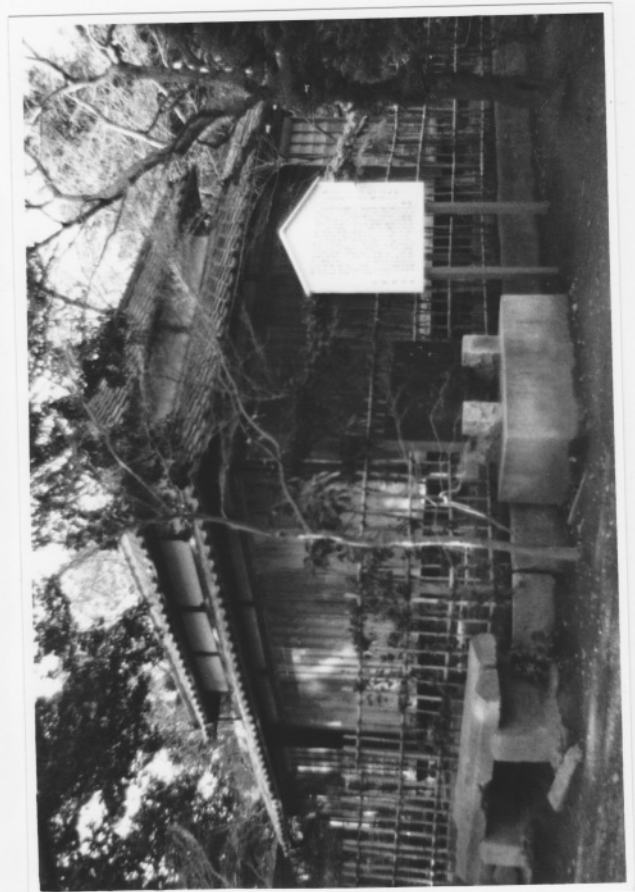
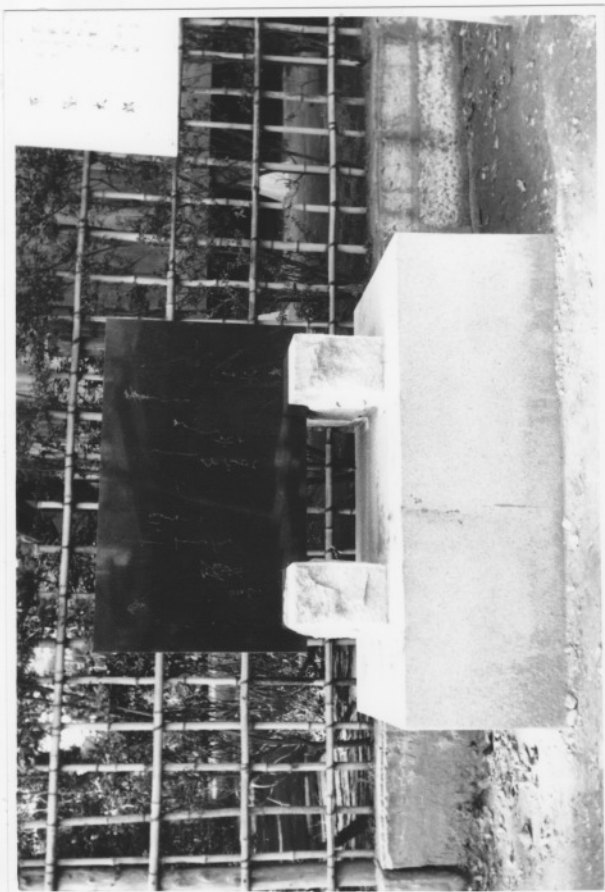
群 雀

立つ

碑陰

昭和四十五年四月吉日

市川市観光協会建之



北原白秋歌碑

所在地 千葉県市川市国府台 3-9 里見公園内 紫烟草舎横

白 秋

華 やかに

さ ひ

し き

秋 や

千 町 田 の

ほ な み か

す め を

群 雀

立 つ

碑陰

昭和四十五年四月吉日
市川市観光協会建之



紫烟草舎の由來

「かつたろの花」「砂山」などの作詩を親しまれて
 いる詩人北原白秋（明治十八年、昭和十七年）
 は大正五年の夏から約一年間、当時小岩にありた
 この離れにおいて、すくれた作品の創作を続けた
 白秋自身、紫烟草舎と名づけたこの建
 物は、その後江戸川の改修工事のために、
 とりこわされ解体されたまゝになつていた。
 たまたま本建物の所有者、本市在住の
 湯浅伝之助氏の厚意ある提供を受けた
 市川市は白秋をしのぶすゝめとして、寂の間どり
 木財などすべて當時のまゝに、ここ里見の地
 に復元した。

市川市
 市川市観光協会



北原白秋歌碑

所在地 千葉県市川市真間四十九 真間山亀井院境内

北原白秋

螢

碑陰

北原白秋

大正五年夏

ここに偶す

平成三年晩夏

市川より多建之

飛

ふ

真間の小川の

夕闇に

鯉すくふ子

が

水音

立つる

は

日恵書



北原白秋歌碑

所在地 千葉県市川市真間 4-4-9 真間山亀井院境内

北原白秋

螢

飛

ぶ

真間の小川の

夕闇に

鰕すくふ子

が

水音

立つる

は

日恵書

碑陰

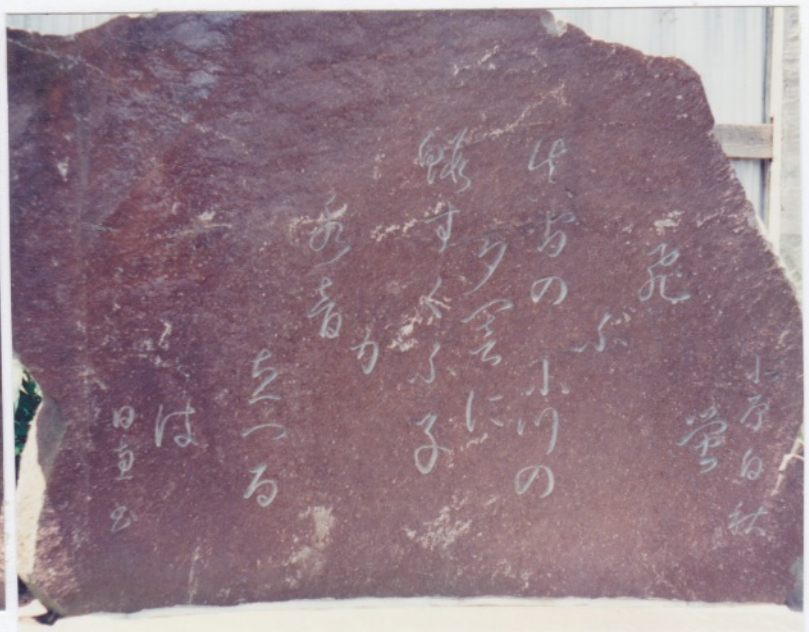
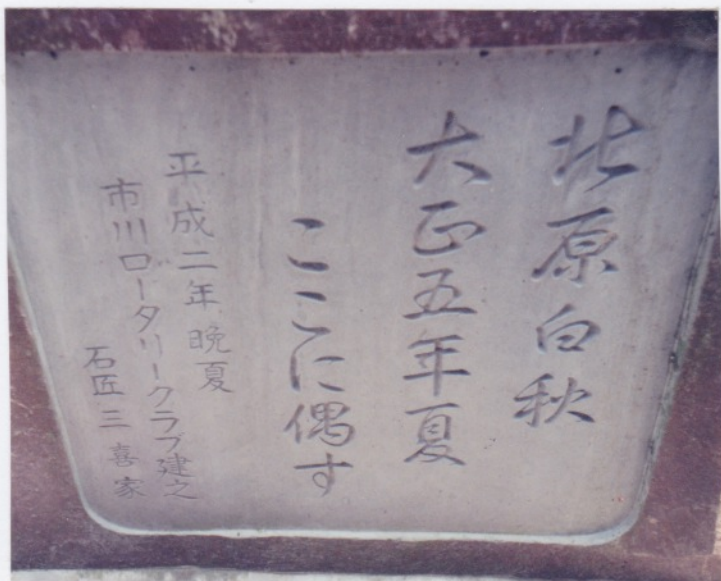
北原白秋

大正五年夏

ここに偶す

平成二年晩夏

市川マタークラブ建之



北原白秋詩碑

所在地 千葉県佐原市与田浦 水生植物園内 あづまの傍ら

かはづの啼くは

ころころ

田螺の啼くは

ころろよ

ころころ ころろ ころころ

萌え来よ

春の下ん田

白 秋

碑陰

北原白秋 明治十八年(一八八五) - 昭和十七年(一九四二)

福岡県の人名は隆吉詩人歌人童謡作家詩集邪宗門また桐の花雲母等多くの詩歌集を世に出した
詩碑は水郷をうたった白秋の長詩水村の春十六島の一節である

かはづの啼くはころころ 田螺の啼くはころろよ

ころころ ころろ ころころ 萌え来よ 春の下ん田

十一月三日

寄贈

佐原市
佐原市教育委員会
北川久子 材木商
佐原市 岩ヶ崎

岩澤和夫撰
原澤春洋書
白鳥石材刻



北原白秋詩碑

所在地 千葉県香取市与田浦 水生植物園内 あづまやの傍ら

かはづの啼くは

ころころ

田螺の啼くは

ころろよ

ころころ ころろ ころころ

萌え来よ

春の下ん田

白秋

碑陰

北原白秋 明治十八年(一八八五) — 昭和十七年(一九四二)
福岡県の人名は隆吉詩人歌人童謡作家詩集邪宗門また桐の
花雲母等多くの詩歌集を世に出した
詩碑は水郷をうたった白秋の長詩水村の春十六島の一節で
ある

かはづの啼くはころころ 田螺の啼くはころろよ

ころころ ころろ ころころ 萌え来よ 春の下ん田

平成庚午年十一月三日

佐原市

佐原市教育委員会

寄贈 北川久子 材木商

佐原市岩ヶ崎

岩澤和夫撰

原澤春洋書

白鳥石材刻



書有岩嶺恩
陵村江島白

北原白秋歌碑

所在地 東京都世田谷区世田谷一三三 世田谷信用金庫前

はろ市に

冬はまづしき

道のしも

桜小学に

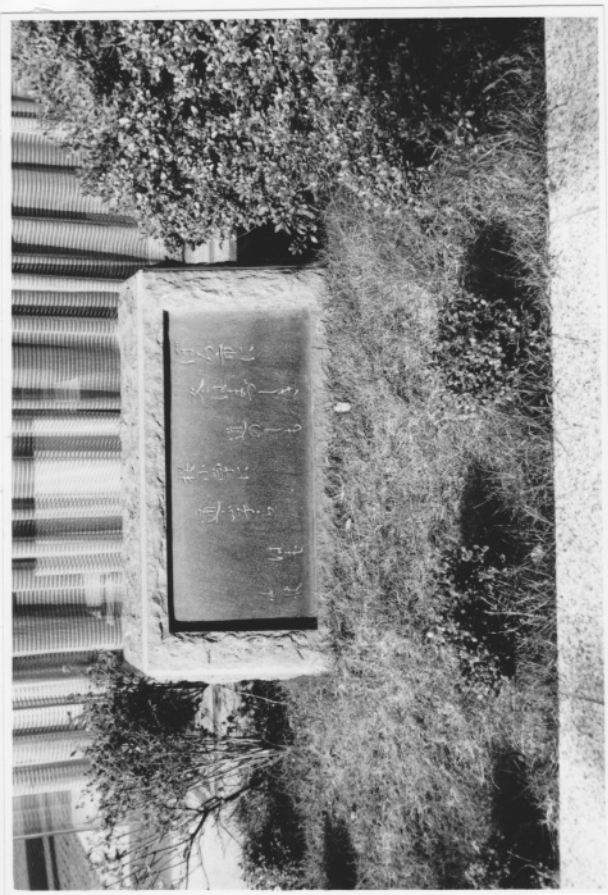
通ふ子ら

はる

白秋

世田谷信用金庫
創立 昭和 46 年 4 月 12 日

碑陰



北原白秋歌碑

所在地 東京都世田谷区世田谷 1-23-3 世田谷信用金庫 前

ぼろ市に

冬はまづしき

道のしも

桜小学に

通ふ子ら

はも

白秋

碑陰(横書き)

世田谷信用金庫

創立 50 周年記念碑

昭和 46 年 4 月 12 日



小学小

代官屋敷



金 日 13

裏側より見る



北原白秋歌碑

所在地 東京都江戸川区北小岩一三三九 八幡神社境内

いつしかに

白秋

夏のあはれと

なりにけり

乾草小屋の

桃いろの月

碑陰

白秋の歌碑

詩聖北原白秋先生が 此処三谷に
移り住むは大正五年五月なり時に先生
三十二才にして最も逆境時代たり
茲にその高風を仰ぎこの偉大なる
詩人を顕彰し永くその詩を讀み敬
慕追憶するもの也
昭和二十年四月六日

北原白秋詩碑建設委員

委員長 小宮幸次郎

小山崎 豊

小川 力蔵

鹿野 まき

千村 三郎

相談役

発起人

協賛者

六名列記

十四名列記

代表

(略)

(略)

江戸川区長 中川喜久雄殿

外書寫 堀 殿

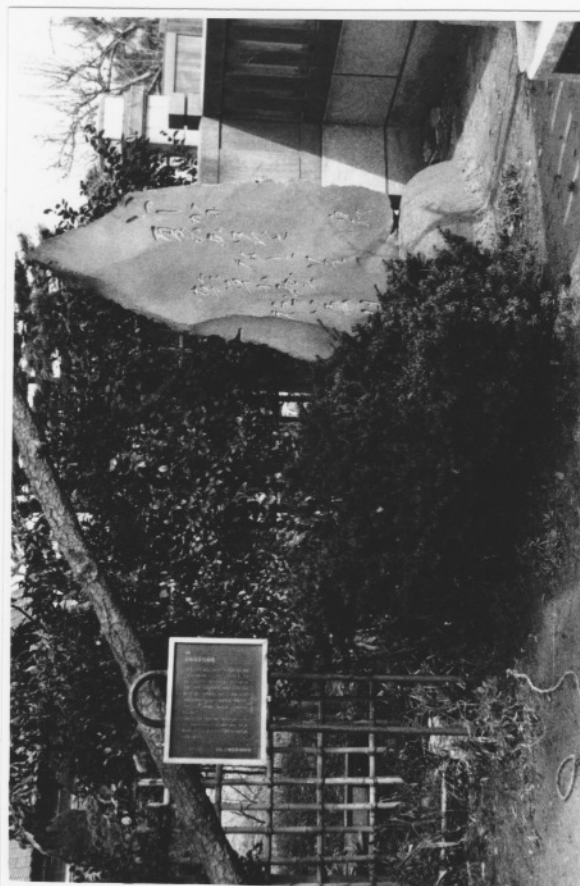
後援

京成電鉄株式会社

読売新聞社

田沢 勉生書

杉浦 静夫刻



北原白秋歌碑

所在地 東京都江戸川区北小岩 8-23-19 八幡神社境内

いっしかに

白秋

夏のあはれと

なりにけり

乾草小屋の

桃いろの月

碑陰

白秋の歌碑

詩聖北原白秋先生が此処三谷に移り住みしは大正五年七月なり時に先生三十二才にして最も逆境時代たり茲にその高風を仰ぎこの偉大なる詩人を顕彰し永くその詩を讃え敬慕追憶するもの也

昭和三十六年四月十六日

北原白秋詩碑建設委員

委員長 小宮幸次郎

山崎 豊

小川 力蔵

鹿野 まき

千村 三郎

相談役

発起人

協賛者

六名列記

十四名列記

代表

(略)

(略)

江戸川区長 中川喜久雄殿

外三五七名殿

後援

京成電鉄株式会社

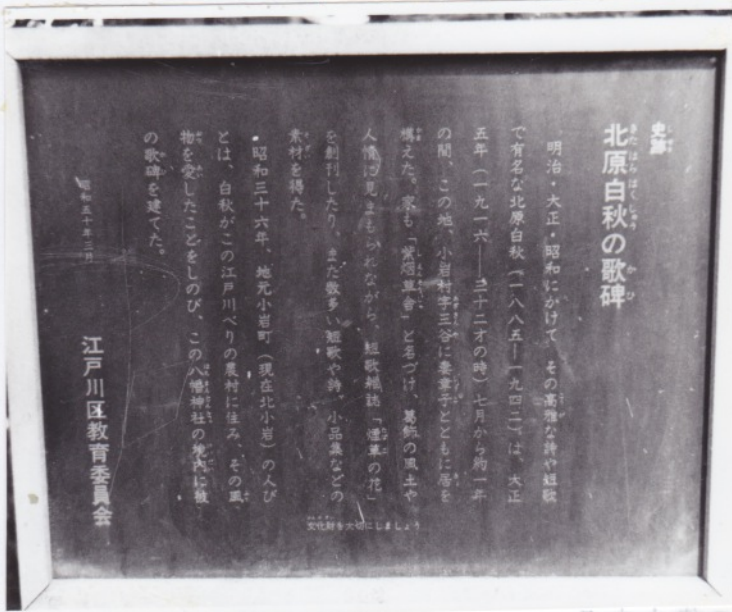
読売新聞社

田沢匏生書

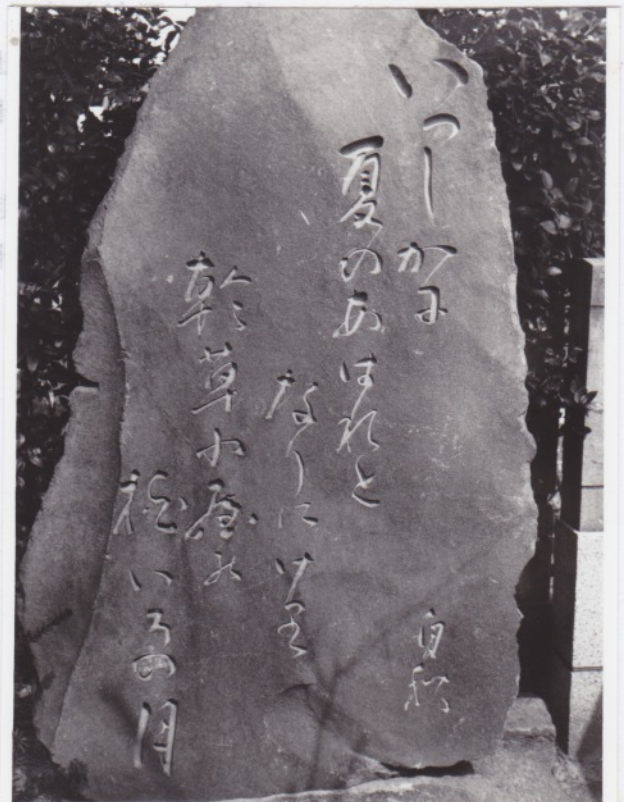
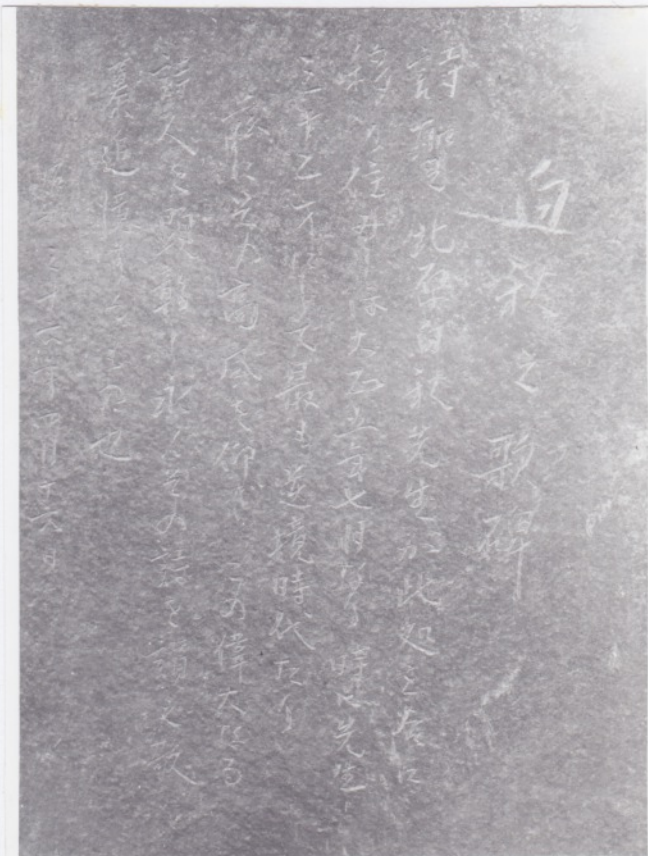
杉浦静夫刻



白秋
歌碑



三十二卷ノ景



北原白秋歌碑

所在地 東京都武蔵野市吉祥寺南町三三十四 岡部春郎氏宅隣

白秋

いく水の

目に

と、まらぬ

青みなわ

せきれいの

尾はふれに

たりけり

碑陰

北原白秋作溪流唱を
因み歌とし庭を我が造
りたる縁に この歌碑
を建てる

昭和三年十二月二日

若林牧春

(注) 碑陰は塀と近すぎる
ためこのように読ん
だが確信はない



北原白秋歌碑

所在地 東京都武蔵野市吉祥寺南町 3-27-4 岡部春郎氏宅庭内

白 秋

いく水の

目に

とゝまらぬ

青みなわ

せきれいの

尾はふれに

たりけり

碑陰

北原白秋作溪流唱を
因み歌とし庭を我が造
りたる縁に この歌碑
を建てる

昭和四十二年十一月二日

若林牧春

(注) 碑陰は塀と近すぎる
ためこのように読んだ
が確信は持てない



井

音源

ハ



北原白秋詩碑

所在地 東京都あきる野市菅生三 西多摩霊園一区

からたちの花

山田耕筈作曲

五線譜

から 花が 咲いたよ
白い 花が 咲いたよ

から 花の いたよ
青い 針の とげだよ

から 花は 垣根よ
いつも おい 道だよ

から 秋は みの るよ
まろ 金の たまだよ

から 花の いたよ
そばで 泣いたよ



北原白秋詩碑

所在地 東京都あきる野市菅生 721 西多摩霊園 I 区

第一面(横書き)

からたちの花

山田耕筈作曲

五線譜

第二面(縦書き)

からたちの

花が咲いたよ

白い白い

花が咲いたよ

からたちの

とげはいたいよ

青い青い

針のとげだよ

第三面(縦書き)

からたちは

畑の垣根よ

いつもいつも

とおる道だよ

からたちも

秋はみのるよ

まろいまろい

金のたまだよ

第四面(縦書き)

からたちの

そばで泣いたよ

みんなみんな

やさしかったよ

からたちの

花がさいたよ

白い白い

花が咲いたよ

碑陰 文字なし

カラー写



13

白 鳳 北

東 - 凱道瀬

(考書附)面一第

考書附)面二第



面三第



面四第

北原白秋歌碑

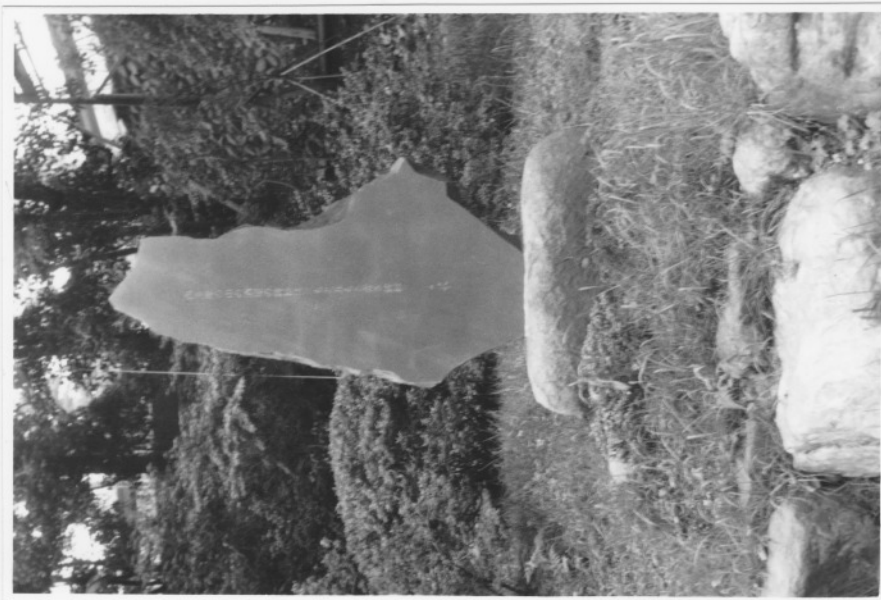
所在地 東京都青梅市沢井一丁目「ままことや」庭園内

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉 白秋

碑陰

北原白秋は大正三年三月、春尚浅い西多摩に吟行し御嶽に登り「造り酒屋の歌」他二篇の長歌を得、「多摩の浅春」と題して長歌集「篋」に収めた。「造り酒屋の歌」は青梅市澤井の舊家小澤酒造所を訪れた折の作であつた。またま右酒醸造の伝統を小澤恒夫氏の純心な郷土愛に、「造り酒屋の歌」の反歌一首を選び詩人白秋の心を西多摩の山紫水明と共に永く留めることゝなつたのは慶びにたゞ、縁あつて歌碑を考案するに当り、形は鉾杉に似た自然石を求め、歌は「篋」初版の活字を拡大し、白秋の署名筆跡も同書より採つた。以上感謝の意をこめてそのゆかりを記す。昭和十五年、筑後同郷後輩

野田宇太郎書



北原白秋歌碑

所在地 東京都青梅市沢井 2-770 「ままごとや」庭園内

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉 白秋

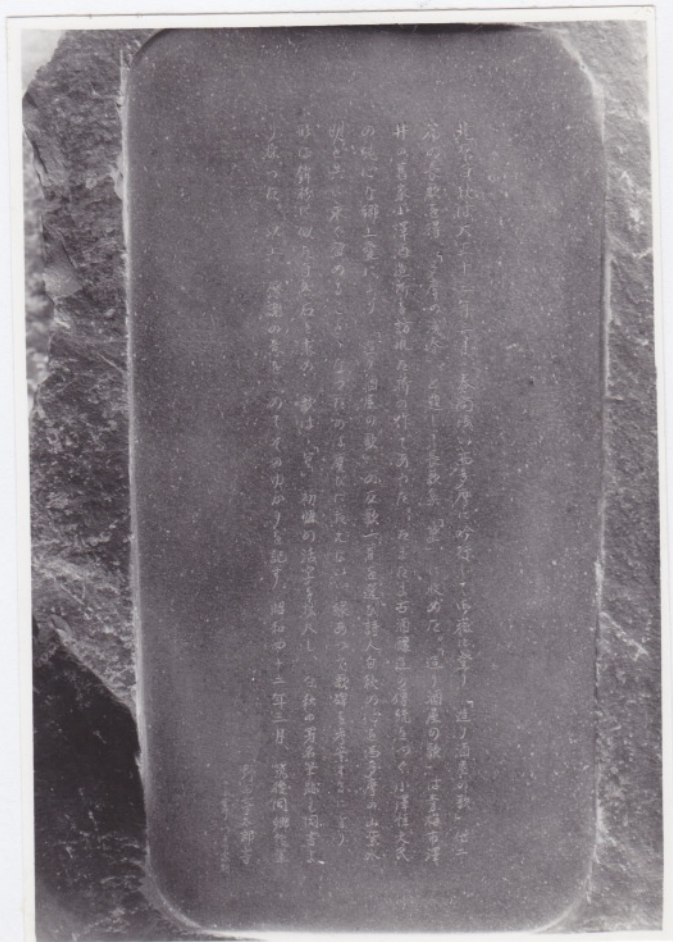
碑陰

北原白秋は大正十二年三月、春尚浅い西多摩に吟行して御嶽に登り「造り酒屋の歌」他二篇の長歌を得、「多摩の浅春」と題して長歌集「篁」に収めた。「造り酒屋の歌」は青梅市澤井の舊家小澤酒造所を訪れた折の作であった。たまたま右酒醸造の伝統をつぐ小澤桓夫氏の純心な郷土愛により「造り酒屋の歌」の反歌一首を選び詩人白秋の心を西多摩の山紫水明と共に永く留めることゝなったのは慶びにたえない。縁あつて歌碑を考案するに当り、形は鉾杉に似た自然石を求め、歌は「篁」初版の活字を拡大し、白秋の署名筆跡も同書より採った。以上、感謝の意をこめてそのゆかりを記す。昭和四十二年三月、筑後同郷後輩

野田宇太郎書



西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉
 る水
 北多摩の山は三もと五もと青き鉾杉
 る水
 西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉
 る水



西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉
 る水

北原白秋歌碑

所在地 東京都八王子市高尾三七 薬王院参道（登山道）途中

白 秋

我が精進

こもる高尾は

夏雲の

下谷うづみ

波と

なづさふ



碑陰

歌碑建設の言葉

北原白秋は明治十八年二月二十五日筑後柳河に生れ 少年の頃文学に志し 精進刻苦天才を発揮して 詩歌 民謡 童謡等詩文に珠玉多く 芸術院会員に推され 昭和十七年十一月二日日本文学史に輝く生涯を終った生前高尾の自然を愛し 時に山房に籠って詩魂を澄ませ 或は塙笛を吹いて童心に遊び 昭和十二年八月多磨大会を開き「高尾山薬王院唱」十七首を遺した碑面の短歌はその一首である

詩聖逝いて二十年 多彩な詩業を偲び霊を慰めるため 大方の協賛により この碑を建てる 歌詞の文字は作品草稿のペン書を拡大したものである

昭和二十七年十一月二日

歌碑建設世話人

田山	中本	紀秀	子順
高城	正	平	
若林	牧	春	
持田	治	郎	
鈴木	龍二		
鈴木			

北原白秋歌碑

所在地 東京都八王子市高尾 2177 薬王院参道(登山道)途中

白 秋

我 が 精 進

こ も る 高 尾 は

夏 雲 の

下 谷 う づ み

波 と

な づ さ ふ

碑陰

歌碑建設の言葉

北原白秋は明治十八年一月二十五日筑後柳河に生れ 少年の頃文学に志し 精進刻苦天才を発揮して 詩歌 民謡 童謡等詩文に珠玉多く 芸術院会員に推され 昭和十七年十一月二日日本文学史に輝く生涯を終った生前高尾の自然を愛し 時に山／房に籠って詩魂を澄ませ 或は／鳩笛を吹いて童心に遊び 昭和／十二年八月多磨大会を開き「高／尾山薬王院唱」十七首を遺した／碑面の短歌はその一首である / 詩聖逝いて二十年 多彩な詩／業を偲び霊を慰めるため 大方／の協賛により この碑を建てる／歌詞の文字は作品草稿のペン／書を拡大したものである /

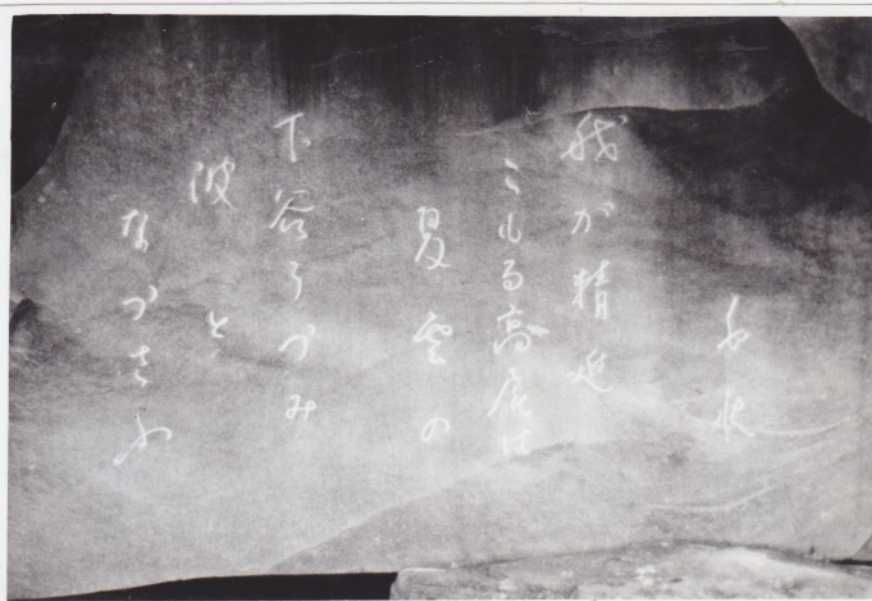
昭和三十七年十一月三日

歌碑建設世話人

(横一列) 鈴木龍二 持田治郎 若林牧春
高城正平 山本秀順 田中紀子



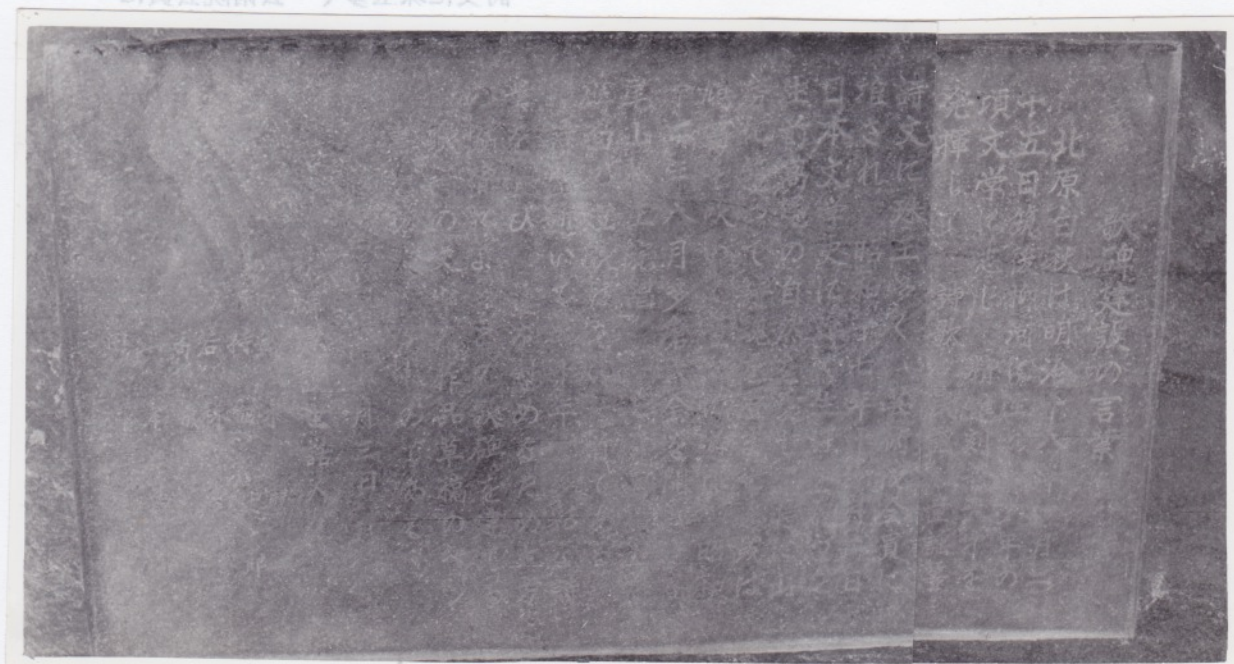
お 風 高 る よ こ



二民
の平
さす

華語道 關丹 那爾 アJ戦災

二員全謝謝甚 >き正来ニ文刊



北原白秋民謡碑

所在地 神奈川県川崎市多摩区登戸三番 丸山教本庁 社殿前

多摩の登戸 十八郎兵衛さきよ

藤は十八尺 藤は十八尺

白秋

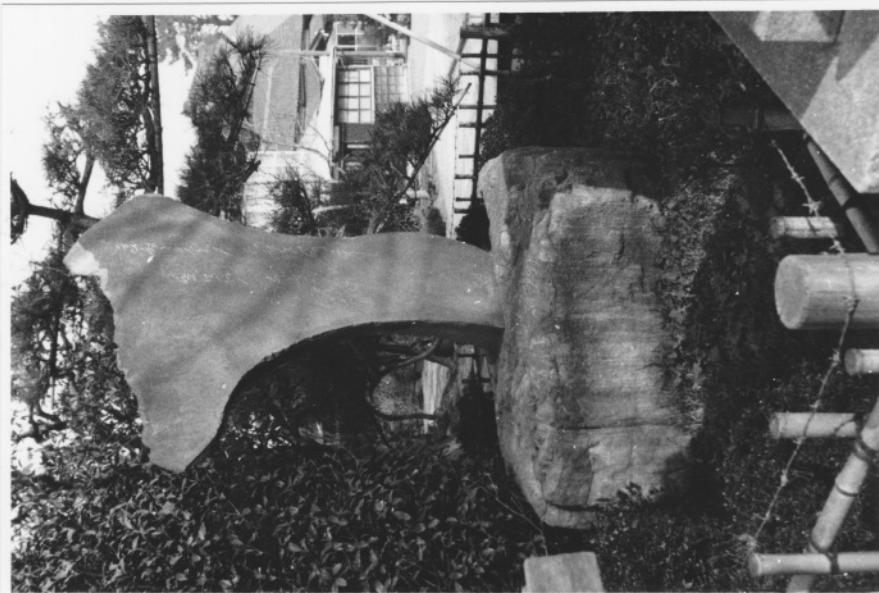
いも盛り

碑陰

昭和四十二年十一月二十三日

丸山教藤の花会 建之

(注) 多摩川音頭の一節



北原白秋民謡碑

所在地 神奈川県川崎市多摩区登戸 1274 丸山教本庁 社殿前

多摩の登戸 六郎兵衛さまよ

藤は六尺 藤は六尺

白秋

いま盛り

碑陰

昭和四十三年十一月二十三日

丸山教藤の花会建之

(注)多摩川音頭の一節

前記 山本静山

もまろ 齋

只六

煉白

〇 齋 老

齋

日三十二月一十平三十四時國
文藝会求の藝道山本



北原白秋歌碑

所在地 神奈川県川崎市高津区久地 3-4-32 久地梅林公園内

久地梅林の梅に

君がため

未明に起きて

梅のはな

見に来りけり

まさやけき花

白秋

碑陰

北原白秋は
昭和八年二月
与謝野寛還暦
祝賀会に梅に因んだ
歌を献歌するため久地
梅林に来て十首を詠んだ
二〇〇四年十一月三日

鈴木穆記

川崎市制

八十周年記念
高津区文化協会
川崎市高津ロータリークラブ
浅川建設株式会社

刻 株式会社 米山石材店





北原白秋長歌碑

所在地 神奈川県川崎市麻生区王禅寺通 王禅寺境内

白秋

柿生ふる柿生の里、名の

みかは禅寺丸柿、山柿の

赤きを見れば、まつふそ

秋は闌けたり。

碑陰

北原白秋が昭和十七年秋 死に近い病床に在って最終ノートに赤鉛筆で記した長歌「柿生」の劈頭の一節をここに刻む 柿生を想う五十二首の短歌とともに歌集「椽」に収められた作品の この草稿は絶筆に近い
昭和四十二年十一月二日 白 菊 会 建之



北原白秋長歌碑

所在地 神奈川県川崎市麻生区王禅寺 940 王禅寺境内

白 秋

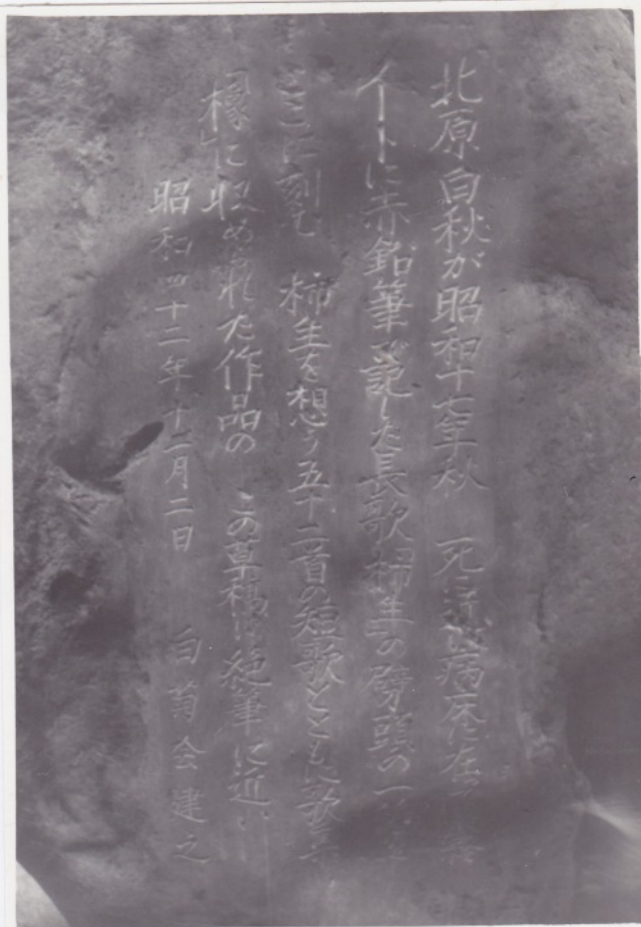
柿 生 ふ る 柿 生 の 里 、 名 の
み か は 禅 寺 丸 柿 、 山 柿 の
赤 き を 見 れ ば 、 ま つ ぶ さ
秋 は 闌 け た り 。

碑陰

北原白秋が昭和十七年秋 死に近い病床に在って最終
ノートに赤鉛筆で記した長歌「柿生」の劈頭の一節を
ここに刻む 柿生を想う五十二首の短歌とともに歌集
「橡」に収められた作品の この草稿は絶筆に近い
昭和四十二年十一月二日 白 菊 会 建 之



下



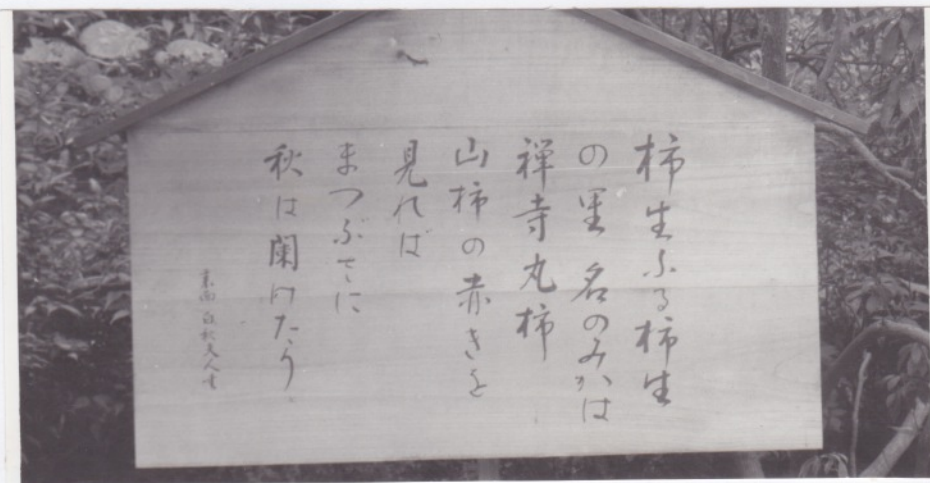
北原白秋が昭和十七年秋 元寇の病床に在りて
 介トに赤鉛筆で詠じた長歌 柿生の劈頭の一
 句に刻記 柿生を想う五十二首の短歌ここに歌集
 標に収められた作品の 一草楊柳絶筆に近
 昭和四十二年十二月二日 白菊会建之

ま

時留地
 華儀来
 謝 せ
 るぬ
 二十四



柿生ふる柿生
 の里名のみは
 祥寺丸柿
 山柿の赤きと
 見れば
 まつぶてに
 秋は閑けたり



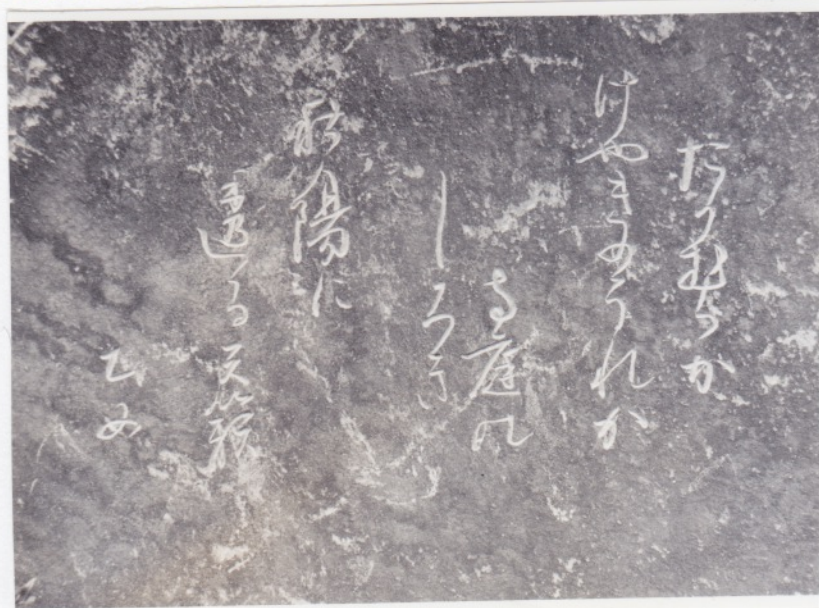
柿生ふる柿生
 の里名のみは
 祥寺丸柿
 山柿の赤きと
 見れば
 まつぶてに
 秋は閑けたり

北原白秋夫人

清水乙女
歌碑



たかむらか
けやうのうれか
寺庭の
秋陽に
透る天籟
乙女



碑陰
北原白秋の清水乙女歌碑
昭和四十九年十月二十日
白菊会・管絃歌会
合同にて建之 清光記



王禪寺本堂

北原白秋歌碑

所在地 神奈川県三浦市三崎町白石五三 見桃寺境内

白 秋

右側面

昭和六年十二月一日

建之

せ

ひ

しそに

秋成か

ふみ

ほみ

せして

庭に

いてたり

白菊の

はな



北原白秋歌碑

所在地 神奈川県三浦市三崎町白石 19・2 見桃寺境内

白 秋

さ

ひ

しさに

秋成か

ふみ

よみ

さして

庭に

いたり

白菊の

はな

右側面

昭和十六年十一月二日

建之

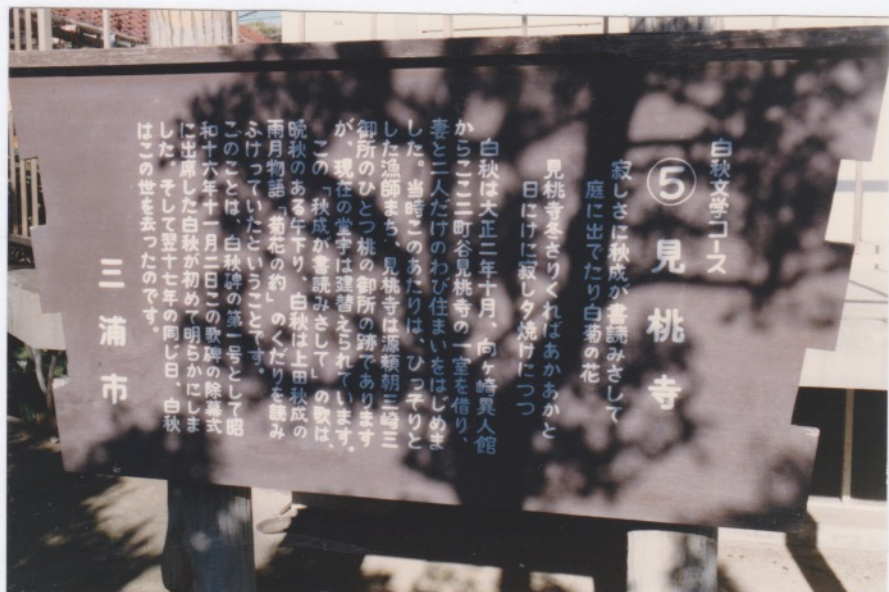


外



白の蔭

の蔭白



北原白秋詩碑・梁田 貞曲譜碑

所在地 神奈川県三浦市三崎町 城ヶ島 大橋の下

雨はふるく 白秋

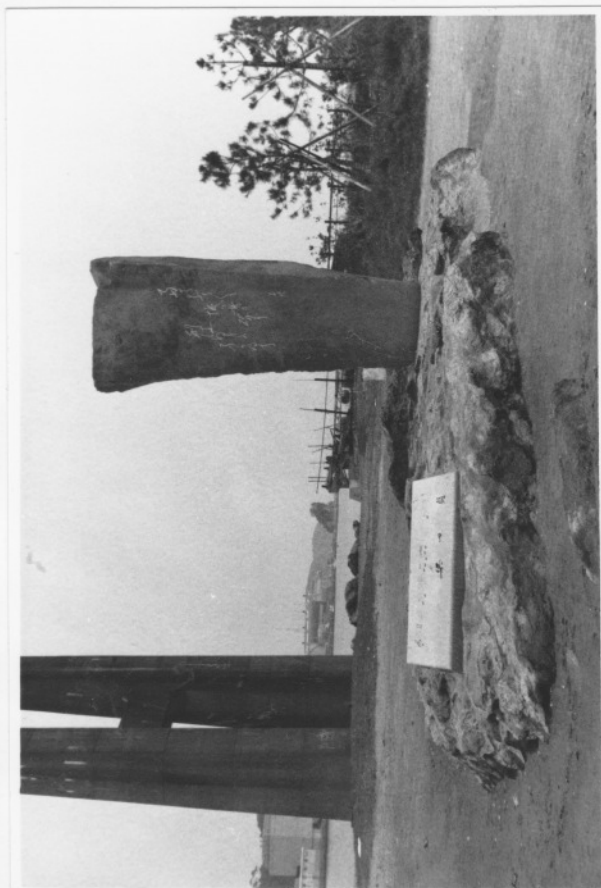
城ヶ島の
磯に

利休

ねすみの

雨がふる

碑陰



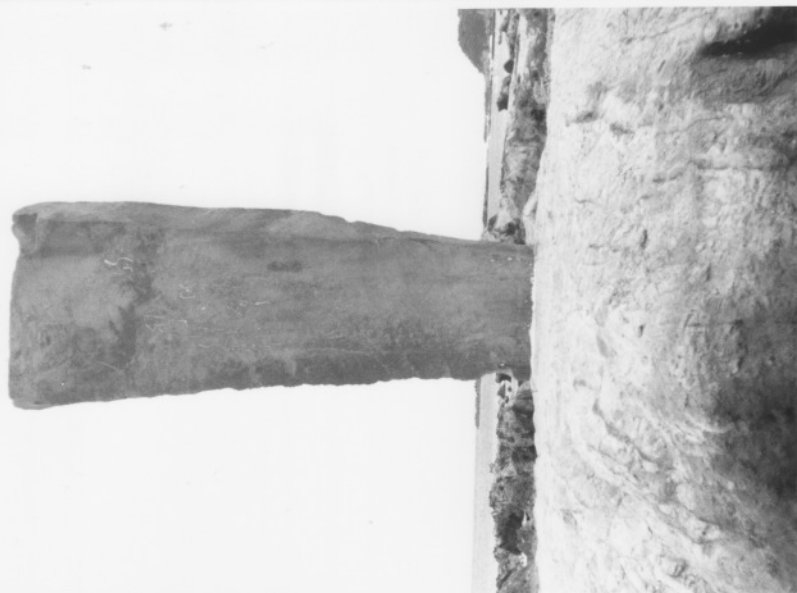
昭十三年七月十日建之

北原白秋先生記念碑 昭和三十四年七月十日建之

梁田貞曲譜碑

貞 譜
梁 田
五 線

曲譜碑裏面
文字なし



北原白秋詩碑・梁田貞曲譜碑

所在地 神奈川県三浦市三崎町 城ヶ島大橋の下

雨はふる／＼ 白秋

城ヶ島の

磯に

利休

ねすみの

雨かふる

碑陰

昭和十六年七月白秋先生 揮毫

北原白秋先生記念碑 昭和二十四年七月十日建之

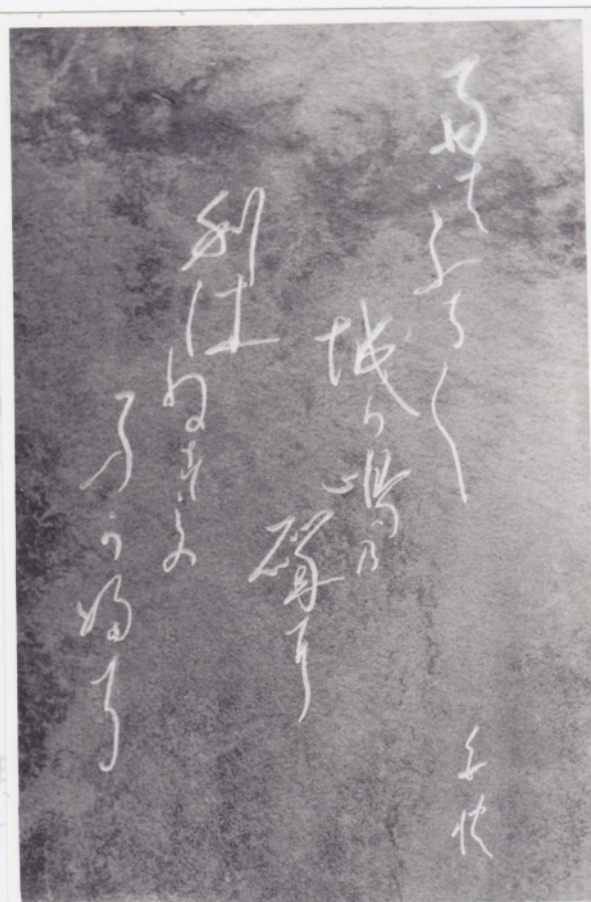
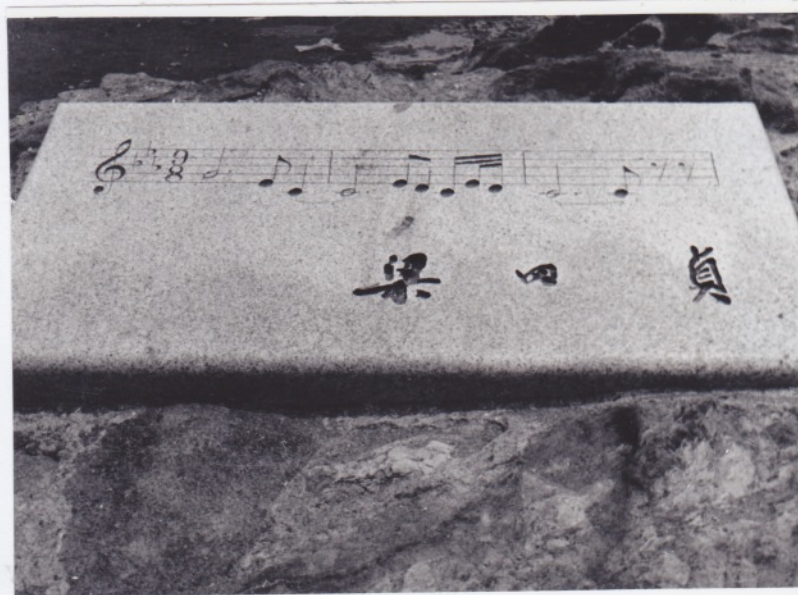
(梁田貞曲譜碑) (横書き)

五 線 譜

梁 田 貞

曲譜碑裏面

文字なし





城ヶ島から見た伊豆大島
← (望遠で撮影)

城ヶ島から見た富士山
←

北原白秋長歌碑

所在地 神奈川県平塚市追分 平塚共済病院構内 白鷺塚

北原白秋

白鷺の 白鷺の

飛べば夕日の高麗寺

月になるやら風ぢややら

能村潔書

碑陰

追分共栄會 白鷺塚建設委員

十二名の氏名列記(略)

昭和二十四己亥歳四月建



北原白秋長歌碑

所在地 神奈川県平塚市追分 平塚共済病院構内 白鷺塚

北 原 白 秋

白 鷺 の 白 鷺 の

飛 べ ば 夕 日 の 高 麗 寺

月 にな る や ら 風 ぢ ゃ や ら

能 村 潔 書

碑陰

追分共栄會 白鷺塚建設委員

十六名の氏名列記(略)

昭和三十四年己亥歳四月建



員委類類製盤白 會業共役重

(湖)湖民各共の六十六

垂具四章文与平四十三時部

白
路
塚
↓

白
社
長
龍
↓



北原白秋童謡碑

所在地 神奈川県小田原市城内 小田原城址公園 公民館内

赤い鳥、小鳥。

赤い鳥、小鳥
なぜ 赤い
赤い寶をたべた。

白い鳥、小鳥
なぜ 白い、
白い寶をたべた。

青い鳥、小鳥、
なぜ 青い、
青い寶をたべた。

白秋

碑陰

床に横たわって
いるため読めず
不明



北原白秋童謡碑

所在地 神奈川県小田原市南町 2・3・4 小田原文学館内 童謡館前

赤い鳥、小鳥。

赤い鳥、小鳥

なぜ／＼赤い

赤い實をたべた。

白い鳥、小鳥

なぜ／＼白い、

白い實をたべた。

青い鳥、小鳥、

なぜ／＼青い、

青い實をたべた。

白秋

碑陰

昔城址公園内の公民館内にあった
時には横たわっていたので不明
現在地に移ってから訪ねてない
ので不明

北原白秋童謡碑

所在地 神奈川県小田原市城山四十九 伝蔵寺 多々く翁園

赤い鳥、小鳥。

赤い鳥、小鳥

なぜ 赤い

赤い實をたべた。

白い鳥、小鳥

なぜ 白い、

白い實をたべた。

青い鳥、小鳥、

なぜ 青い、

青い實をたべた。

白秋



碑陰

みづくの家跡

昭和三年五月十六日これを建つ
北原白秋記念館建設委員会

北原白秋童謡碑

所在地 神奈川県小田原市十字 伝肇寺 みみずく幼稚園前

赤い鳥、小鳥。

赤い鳥、小鳥

なぜ／＼赤い

赤い實をたべた。

白い鳥、小鳥

なぜ／＼白い、

白い實をたべた。

青い鳥、小鳥、

なぜ／＼青い、

青い實をたべた。

白秋

碑陰

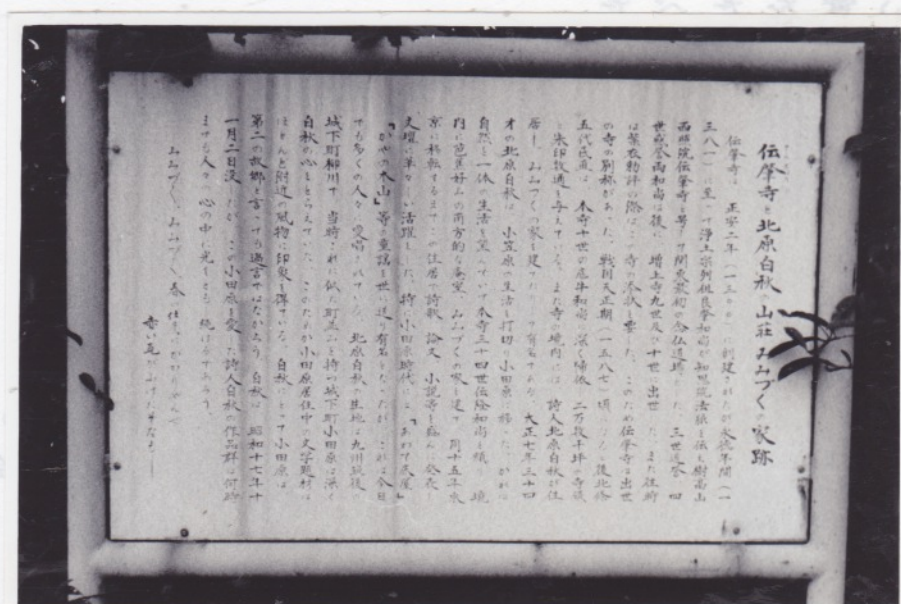
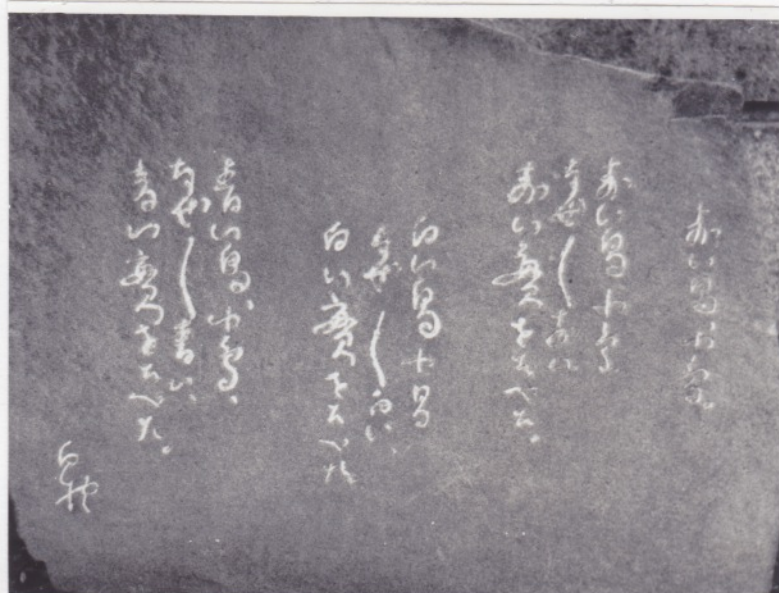
みみずくの家跡

昭和三十二年五月二十六日これを建つ

北原白秋記念館建設委員会



$\begin{matrix} & \alpha \\ \beta & \gamma \end{matrix}$



北原白秋歌碑

所在地 山梨県韮崎市若宮二丁目R 韮崎駅前

韮崎の

碑陰

白きペンキの驛標に

昭和四十四年十二月三日

白鳳会建之

薄日のしみて

明治四十二年十一月二十日

光るさみじき

韮崎駅にて

北原白秋作歌

白秋



北原白秋歌碑

所在地 山梨県韮崎市若宮 1-1 JR 韮崎駅前

韮 崎 の

白 き ペ ン キ の 驛 標 に

薄 日 の し み て

光 る さ み し さ

白 秋

碑陰

昭和四十四年十一月二日

白鳳会建之

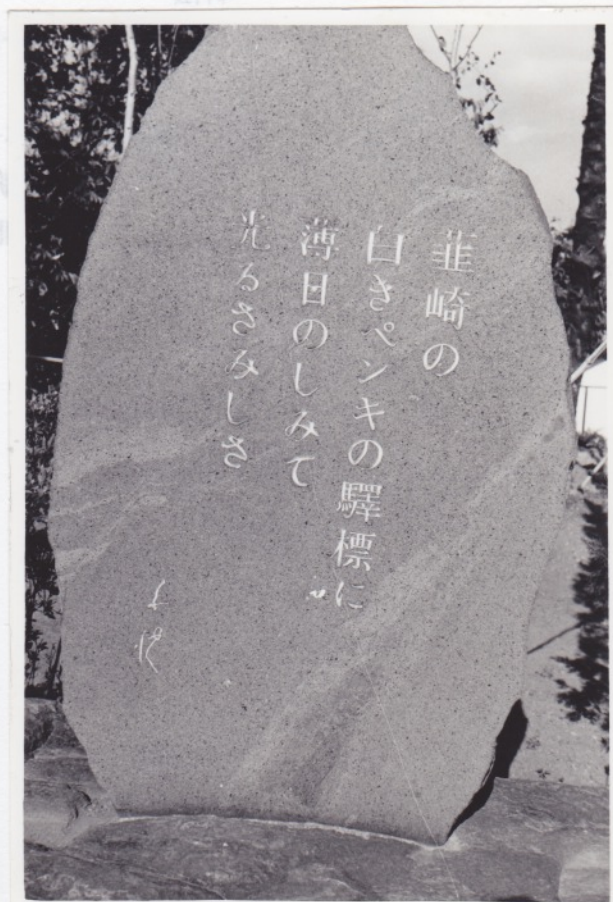
明治四十二年十一月二十日

韮崎駅にて

北原白秋作歌



白 燈



北原白秋詩碑

所在地 新潟県新潟市西船見町 護国神社横

すなやま

うみは あらうみ ちしうは そとよ
すずめ なけ なけ もう ひは くれた
みんな よべ よべ おほしをま でたぞ
くれりや、すなやま じおなり ばかり
すずめ ちり ちり まだ かぜ あれる
みんな ちり ちり もう だれもみえぬ
かえろ かえろよ くみはら わけて
すずめ ちよなら ちよなら あした
うみよ ちよなら ちよなら あした

北 原 白 秋



碑陰

詩人北原白秋先生一九二二年此地
に遊び砂山の童謡を作る新潟市民
有志相ばかりこの詩碑をゆかりの
地に建てその面影をしのぶ

一九六一年六月

北原白秋先生童謡詩碑建設委員会

北原白秋童謡碑

所在地 新潟県新潟市西船見町浜浦 護国神社近く

すなやま

うみは あらうみ むこうは さどよ

すずめ なけ なけ もう ひは くれた

みんな よべ よべ おほしさま でたぞ

くれりや すなやま しおなり ばかり

すずめ ちり ちり また かぜ あれる

みんな ちり ちり もう だれもみえぬ

かえろ かえろよ ぐみはら わけて

すずめ さよなら さよなら あした

うみよ さよなら さよなら あした

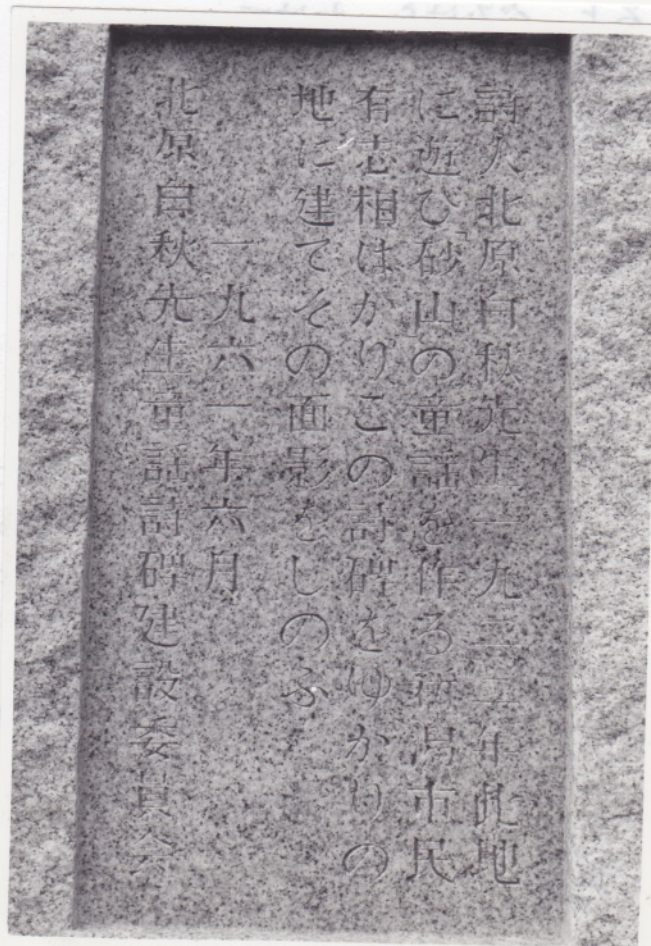
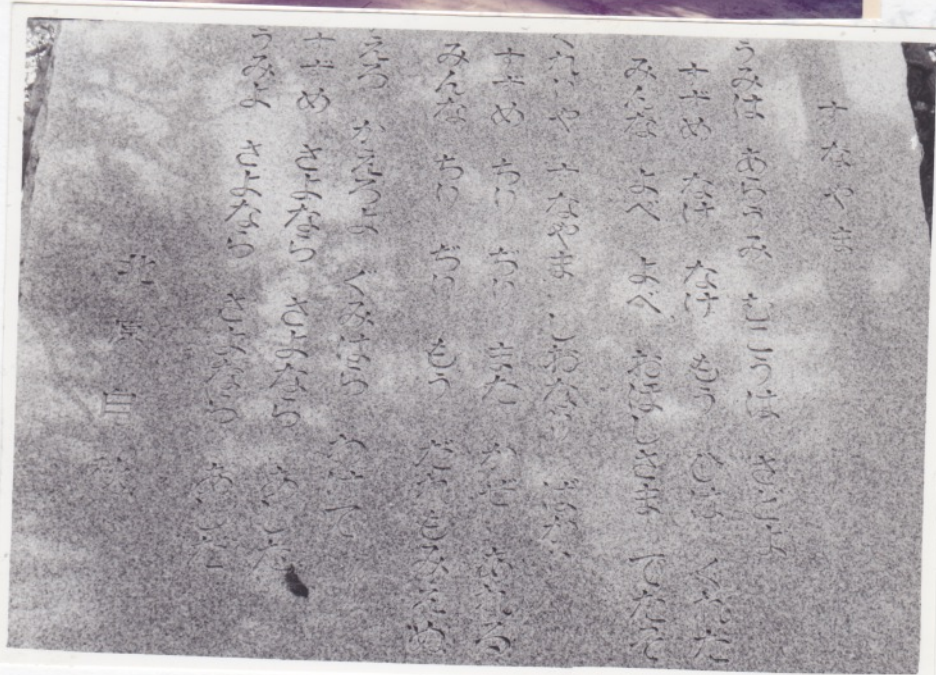
北原白秋

碑陰

詩人北原白秋先生一九二二年此地
に遊び砂山の童謡を作る新潟市民
有志相はかりこの詩碑をゆかりの
地に建てその面影をしのぶ

一九六一年六月

北原白秋先生童謡詩碑建設委員会



北原白秋歌碑

所在地 長野県上田市別所温泉二套 北向観音境内 薬師堂下

観 音 の

この大前に

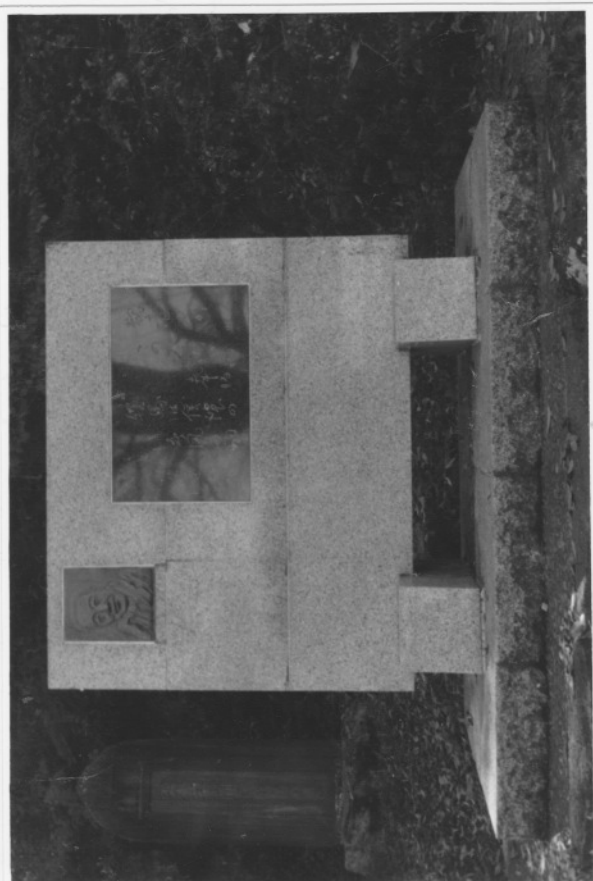
奉 る

繪馬は信濃の

春風の駒

北原白秋

北原白秋
の
レリーフ



碑陰

日本詩壇の巨匠
北原白秋先生は
大正十二年四月
御家族同伴にて
別所温泉に来遊
しその折北向観
世音に詣で奉獻
の繪馬を見て深
き感動を覚え優
に七十六首の短
歌を詠ぜらる
たまたま先生歿
後廿周年を迎う
るに際しわれら
同志の者相集まり
故人の遺作を
追唱すると共に
繪馬に寄せし珠
玉の一首を選び
て碑に刻み之を
当山境内に建立
して永く後世に
伝えんとするも
のなり

昭和七年二月廿日

北山泰樹等

真 半田孝海

鑑 半田孝淳

北原白秋歌碑

所在地 長野県上田市別所温泉 1656 北向観音境内 薬師堂下

観 音 の

こ の 大 前 に

奉 る

繪 馬 は 信 濃 の

春 風 の 駒

北 原 白 秋

北原白秋の
レリーフ

碑陰

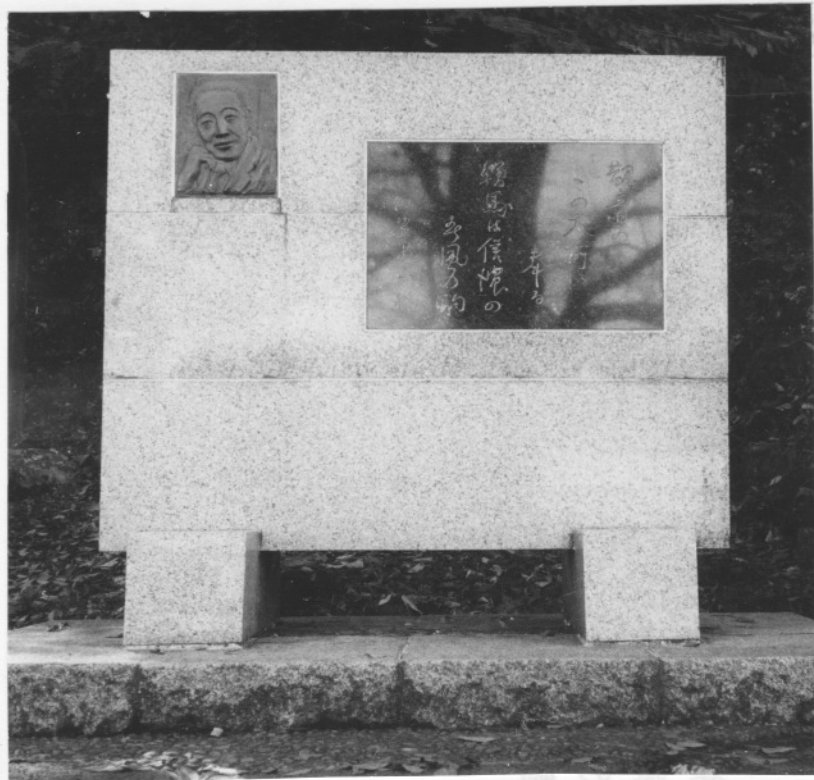
日本詩壇の巨匠
北原白秋先生は
大正十二年四月
御家族同伴にて
別所温泉に来遊
しその折北向観
世音に詣で奉献
の絵馬を見て深
き感動を覚え優
に七十六首の短
歌を詠ぜらる
たまたま先生歿
後廿周年を迎う
るに際しわれら
同志の者相集ま
(以下下段に)

り故人の遺作を
追唱すると共に
絵馬に寄せし珠
玉の一首を選び
て碑に刻み之を
当山境内に建立
して永く後世に
伝えんとするも
のなり

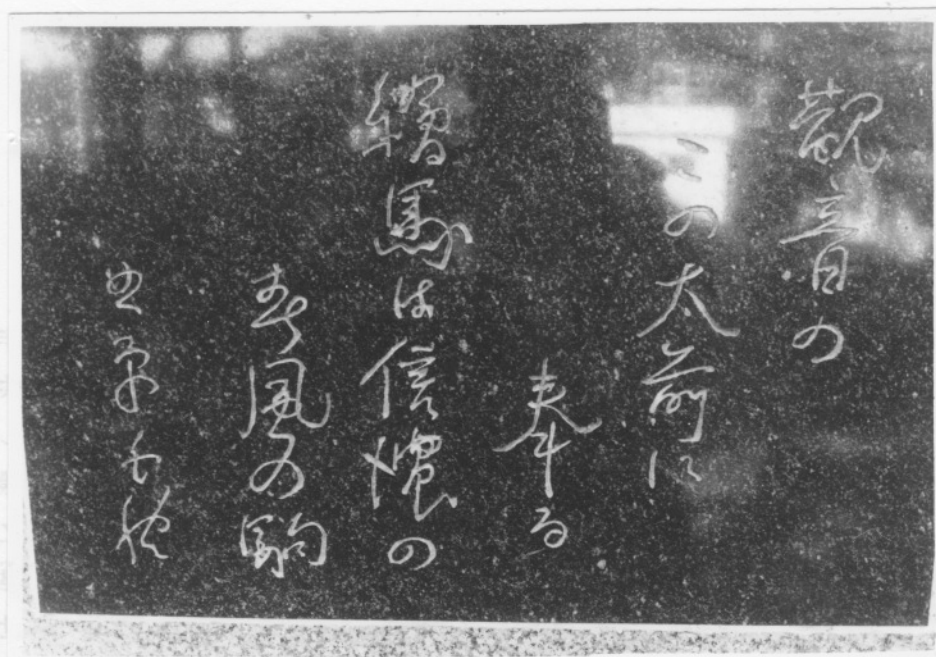
昭和廿七年十一月廿五日

貫主 半田孝海

住職 半田孝淳



北風
歌集



北原白秋詩碑

所在地 長野県北佐久郡軽井沢町長倉星野三叉 星野温泉入口

世の中よ

あはれなりけり

常なけと

うれしかりけり

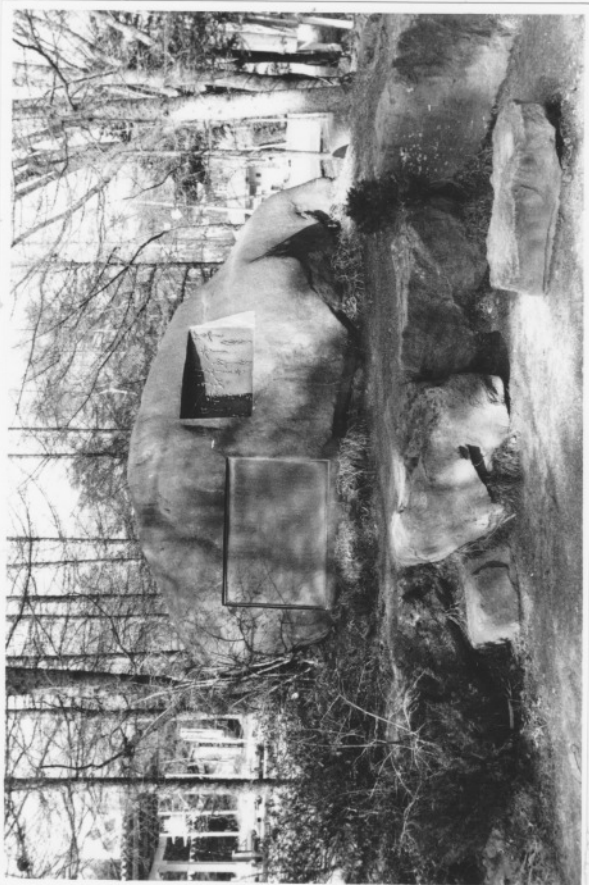
山川にやまかはの音

から松に

落葉松のかぜ

信濃にてうたへる

白 秋



五
からまつ
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとささやきにけり。

六
からまつ
浅間嶺にけふり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

七
からまつ
かきさびしけの林の雨は
からまつ鳥の鳴けるのみなるけし。
からまつの濡るのみなる。

八
世の中よ あはれなりけり。
常なけどううれしかりけり。
山川に山かはの音
からまつにかはの音
からまつのかぜ。

さびさびといそぐ道なり。

碑陰

北原白秋の名作落葉松の詩は、大正十年この地でうたつたもので、水墨集には次の序文が記されている。

落葉松の幽かなる、その風のこまかにさびしく物あはれなる、ただ心より心へと傳ふべし。また知らむ、その風はそのささやきは、ただ我が心の心のささやきなるを、讀者よ、これらは聲に出して歌ふべききはのものにあらず、ただ韻を韻とし、句を句とせよ。

白秋をしのび、白秋の詩業をたたへ、ここに北原白秋文学碑を建立する。

昭和四十四年五月

軽井沢町長 佐藤今朝市郎

北原白秋詩碑

所在地 長野県北佐久郡軽井沢町長倉星野 2148 星野温泉入口

世の中よ

あはれなりけり

常なけと

うれしかりけり

山川にやまかはの音

から松に

落葉松のかせ

信濃にてうたへる 白秋

落葉松

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつづけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

六

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

七

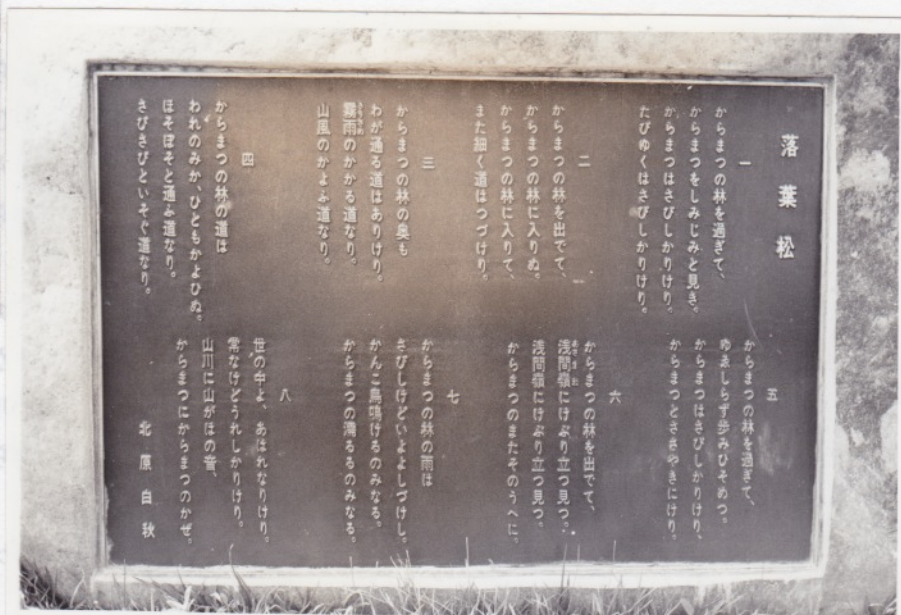
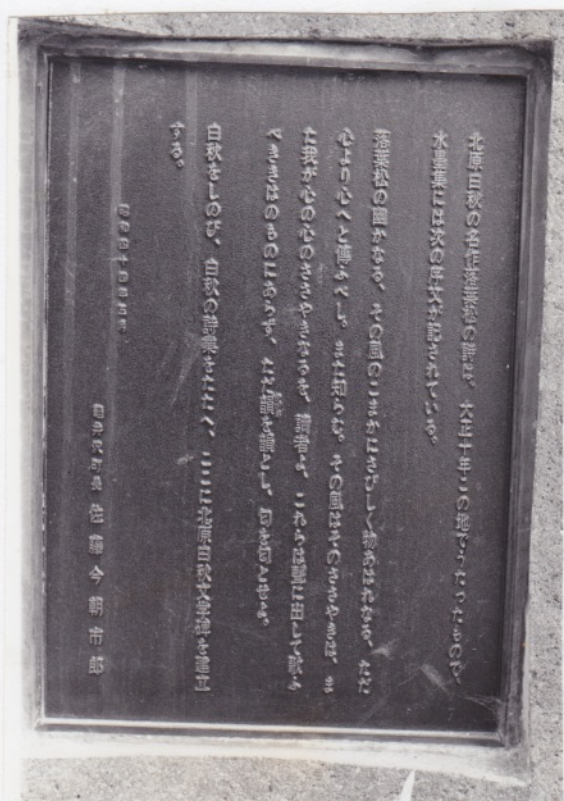
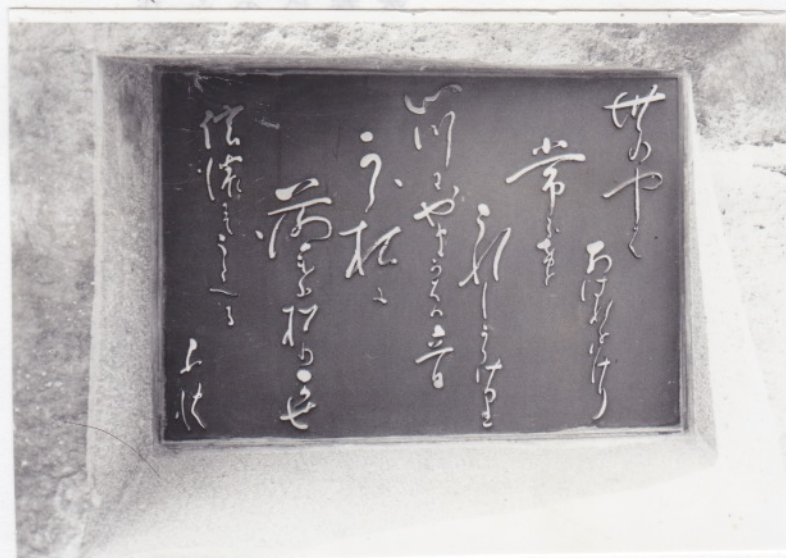
からまつの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山かはの音。
からまつにからまつのかぜ。

北原白秋

(注)霧雨にきりさめ、浅間嶺にあさまねのルビあり (碑陰は次頁にあり)



碑陰

北原白秋の名作落葉松の詩は、大正十年この地でうたったもので、水墨集には次の序文が記されている。

落葉松の幽かなる、その風のこまかにさびしく物あはれなる、ただ心より心へと傳ふべし。また知らむ。その風はそのささやきは、また我が心の心のささやきなるを、讀者よ、これらは聲に出して歌ふべききはのものにあらず、ただ韻を韻とし、句を句とせよ。

白秋をしのび、白秋の詩業をたたへ、ここに北原白秋文学碑を建立する。

昭和四十四年五月

軽井沢町長 佐藤今朝市郎



からまつしの信物と父白秋

大正十一年八月一日から一週間里野温泉で芸術教育夏季講習会
を聞いたとき講師の一人として参加した父は目前に浅間山の噴煙を
見ながら下は溪谷で対岸のから松山へ霧が流れていた会場は朽木
小屋で道端に上ると右手から松の山が見えた
連日若い紋着を着た熱心に質疑をうけて父は悦んだ内村鑑三
島崎藤村とききた大家の科外講義すらあつた「落葉松」の詩は
その年の十月になつて突然感興がわいて作つたものである

「落葉松」の詩をおもう時「世の中は無常であるか山川に
山川の音のからまつのからまつのかげするところに形の煮く永遠の
つねに現存していることと知る

昭和四十四年六月 北原隆太郎

落葉松

一 からまつしの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二 からまつしの林を出でて、
からまつしの林に入りぬ。
からまつしの林に入りて、
また細く道はつつけり。

三 からまつしの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四 からまつしの林の道は
われのみか、ひとにもかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

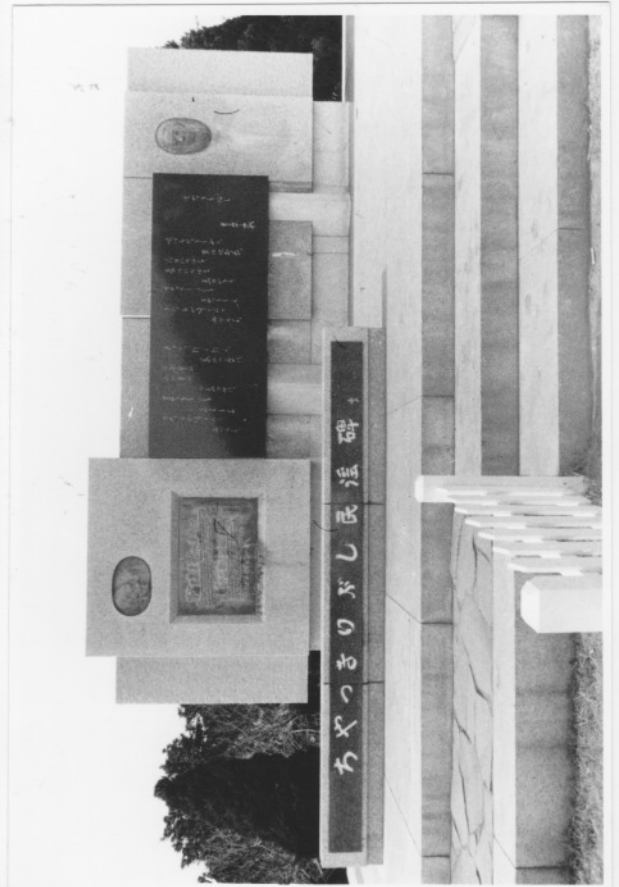
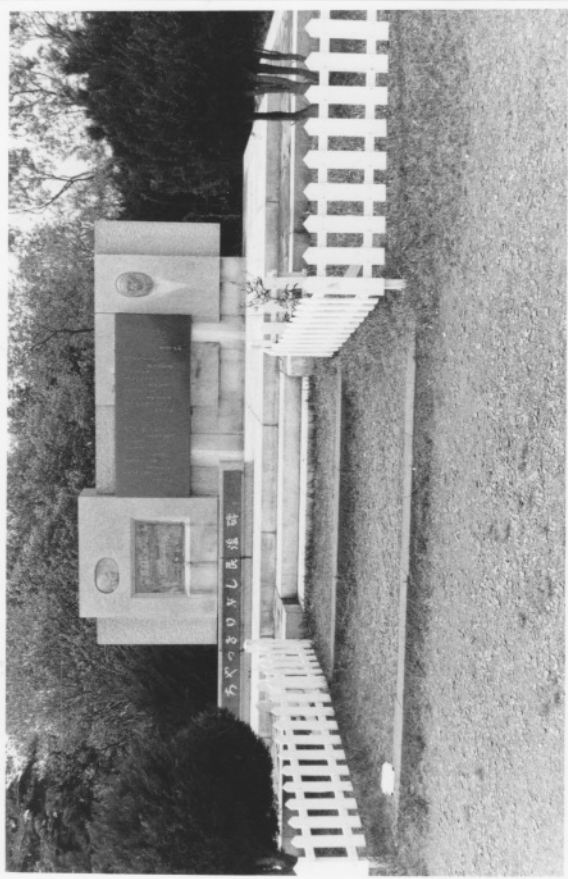
五 からまつしの林を過ぎて、
ゆめしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとささやきにけり。

六 からまつしの林を出でて、
浅間山にけり立つ見つ。
浅間山にけり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

七 からまつしの林の雨は
さびしけいよよしづけし。
かんに鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

八 世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がほの音、
からまつにからまつのかぜ。

北原 白秋



北原白秋民謡碑

所在地 静岡県静岡市清水馬走 日本平ロープウェイ終点 土産店屋上

北原白秋の
レリーフ

ちゃつきりぶし
北原白秋

唄はちゃつきりぶし、
男は次郎長、
花はたちばな、
夏はたちばな、
茶のかをり、
ちゃつきり 〵
ちゃつきりよ、
きやアるが啼くんで
雨づらよ。

さアさ、行こ行こ、
茶山の原に、
日本平の、
にほん平の、
お茶つみに、
ちゃつきり 〵
ちゃつきりよ、
きやアるが啼くんで
雨づらよ。

町田嘉章の (この下に次の文句あり)(横書き)

レリーフ ちゃつきりぶし 嘉章曲
五線譜

ちゃつきりぶし民謡碑 (ここに縦書きで嘉章とある)

(碑陰は次の頁にある)



民謡碑



碑陰(横書き)

ちやつきりぶし民謡碑

建立者

ちやつきりぶし民謡碑建設委員会

会長 静岡県知事 斎藤 寿夫

副会長 静岡市長 荻野 準平

同 清水市長 佐藤 虎次郎

同 静岡県茶業会議所会頭 秋野 三千雄

同 静岡鉄道(株)取締役社長 川井 健太郎

竣工年月日 昭和 41年 9月 18日

設計 浅井 行雄

設計管理 静岡鉄道株式会社

製作 田中石材興業株式会社

北原白秋民謡碑

所在地 静岡県清水市上原(三軒)二番地 千手寺門前

狐音頭

北原白秋

狐十七、

碑陰

昭和卅年八月九日建つ

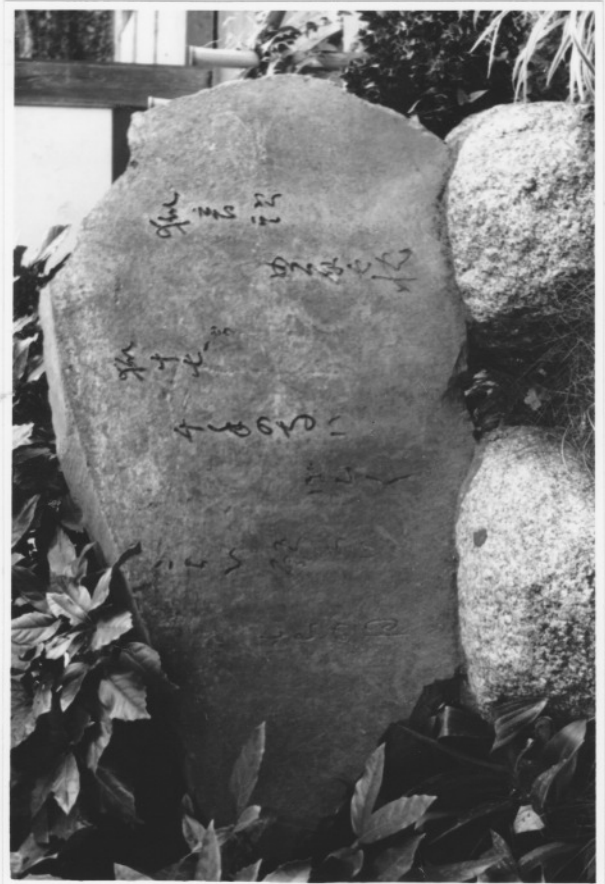
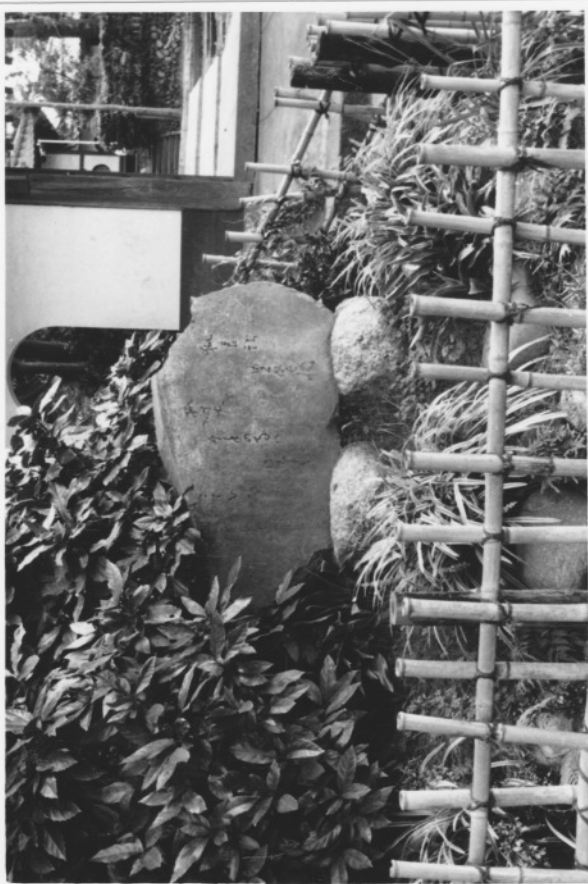
白秋を讀める会

千手の寺に

ほんく

いよに願あけ

あちの月



北原白秋民謡碑

所在地 静岡県静岡市清水上原(うわはら)174・2 千手寺門前

狐音頭

北原白秋

狐十七、ヨウ

千手の寺に

ぼん／＼

こよい願あけ

もちの月

碑陰

昭和卅五年八月九日建つ

白秋を讃える会



風井

根井

藤

八の八

廿も題のもこ



北原白秋民謡碑

所在地 静岡県伊東市松川 なぎさ橋畔

伊 東 音 頭

北 原 白 秋

伊東湯どころ

ひがしの海に ヨホイ

潮はゆららと

潮にゆららと 日が昇る

さぶらんらんてば浪の音
とろろんとんてばお湯の音
山では椎茸蜜柑にたちばな
トノホイノ ホイホイ

沖の初島は

水仙島よ

島の女神は

花の女神は初木姫



碑陰

啓上

先日は折角の御光来に失礼いたしました。あれからまた
また推敲し三四日前町田君の方へまはしました。
さぶらん節も伊東音頭と改め雛子もすっかり別
のものとなりました。伊東小唄の雛子は全く苦勞しまし
た。これでどうやら物になりさうです。町田君も今度
こそ練りに練りあげたものにすると思つてゐます。津ぶ
しものやうな氣品のあるものになりたいと思つてゐます。
作曲完成の上はもう一度町田君に行つてもらひ、
徳沢さんと一緒に振の稽古まで頂まして歸つて
御ひきとめ願ひます。の節は当分歌はないやうに
一の歌と片山津温泉の歌を作りに出かけます。

廿七日

北原白秋

伊東音頭、伊東小唄は白秋先生の作
によるものです。以来伊東市の観光に
ともに親しみ、つがれておりますがここに
先生御逝去四十周年を記念し、この先生を
偲び歌碑を建立いたしました。
なおこの手紙は昭和四年十二月後の伊東市長であった
太田賢治氏宛に送られたものです。

昭和四十四年八月廿日

伊東市長 稲木敏郎